お妻、卓に凭れて泣き伏す。倉田　持餘して凝つと見下しゐる。やがて、細き女の泣き聲。

電燈、點る。

靜かに、幕。

第二幕

時——前幕と同じ日。夜。

處——靜岡市の割烹店。浮月亭の一室。

その土地第一流の料理店の廣間。床の間棚飾りありて、庭面を見る。庭には有名なる泉水あり、假山など見る。楣間には貴紳大書の額面など掲げ、大小三間ほどに劃らる。廣き廊下或は又演者の都合にて、室内屋外を共に顯はして、泉水のなかに突出せる廣間及び廊下など見するもよろし。

幕明く。電燈ともりゐて舞臺は空虛なり。やゝ長き間を置いて、藝者、半玉等の賑かに笑ふ聲、どつと聞え來る。やがて手拍子の音聞え、藝者等四五人、笑ひながら出て來る。幇間甚孝、厭味らしき扮裝にてその間にまじる。

桃中軒雲右衛門、袴の紐とけてズル〳〵と引擦りつゝ、女どもを追うて廣き廊下を出て來る。即座の座興に、淨手場より七段目の由良之助の身振りにて出て來りしなり。半玉等、面白さうに逃げ廻はる雲右衛門、三十七八、彼一流の結髪にて、二つ巴の紋付袴。したゝかに醉ふ。

その後より靜岡縣の事務官留岡東助、不審さうに廊下の隅に立ちて雲右衛門を見送りゐる。洋服にてかなり醉ふ。二十八九歳、青年紳士。

桃中軒　（大手を擴げて蹌めきつゝ）捉まへて酒にしよう、うゝい、捉まへて酒飲ましよ。はゝはゝゝ。

半玉等、逃げる。幇間甚孝、勤めぶりにわざと捉まる。

桃中軒　さあ、さゝ、捉まへた。（目を開きて）甚孝か。はゝはゝゝ。（力任せに頸筋を掴む）知つてるか、甚孝。おれを……おれを知つてるか。

甚孝　痛い、痛々々……知つてます、知つてます。

桃中軒　嘘を吐け、出鱈目云ふな。何んで、貴樣、知つてるもんだ。

甚孝　知つてます〳〵、寫眞でも見てゐる、新聞にも出てゐます。

桃中軒　思ひ出したか、分つたか、貴樣……知つてるか。

甚孝　痛い〳〵〳〵……痛い。

桃中軒　ほんたうにおれを知つてゐたら、この指環をやる。（一種本能的の憎惡と見ゆるまでに、甚孝の頸を締める）

甚孝　痛い。痛、痛、痛……（泣聲になりて）日本中に師匠を知らない者はねえ。知つてゐます〳〵。

桃中軒　嘘を吐け！（甚孝を突飛ばし、自分も袴の裾を踏んで、そこに倒れる）うん、この部屋がいゝ、酒持つて來い。

甚孝　（頸や肱をさすりつゝ）師匠は眞劍になるから厭さ。こんなに、赤くなつちやつた。

桃中軒　酒を持つて來い。

甚孝　又、お引越しでげすかい。

桃中軒　酒だ！。

甚孝　あい〳〵い。

甚孝、走り去る。藝者等も共に手傳ふ。

事務官留岡、障子の外まで來る。

留岡　失敬だが、君は桃中軒……雲右衛門君だらう。

桃中軒　（醉眼朦朧として）　貴公は誰だ。

留岡　僕はこの縣の事務官留岡と云ふ者だが、福岡縣に任官中熱烈なる讃美者になつた者だ。

桃中軒　安役人だなあ……。

留岡　奇遇だ、全く奇遇だ。今新聞記事からして、上官や土地有志者に向つて、盛んに君の宣傳をしてゐたのだよ。

桃中軒　（頭をフラ〳〵しつゝ、呟く）　何を云やがる。……

留岡　僕紹介するから、後一同に會つてくれ給へ。丁度宴會があつて、警察縣廳師團の主腦部が集つてゐるんだ。僕紹介するよ、紹介するよ。はゝはゝ。

桃中軒　主腦部なんか何うでも好い。それより藝者を繰合つてくれ給へ。官僚の癖に、藝者獨

專は不都合だ。

留岡　後に飲まう、君、後に飲まう。關東では未だ君の藝術を知らないから、驚きやがらないんだ。はゝはゝ。握手々々。

留岡、愉快さうに笑つて去る。その間に藝者等は、ちやぶ臺、酒器などをはこび來る。甚孝、一緒に立廻はる。

甚孝　さア〳〵〳〵、雛壇を飾つた〳〵。先づ最初が北海道の數の子、銚子の素干し、お次は唐墨、次は水母、七色菓子の盛分けとござい。（小皿物を臺に並べつゝ）　旦那のお好きな紅葉ツ子、日光唐辛に木の芽の佃煮……。

桃中軒　甚孝。

甚孝　へえ

桃中軒　手前ほんと……おれを思ひ出せないか。

甚孝　又始まつた。諄うい諄い。くどい順慶は洞ケ嶽。

桃中軒　ほんとに貴樣は……。

甚孝　これ、ヤツかましい。いま日本に桃中軒の大師匠を知らねえ者あれば、面を出せろ、ぷるゝ、おれが相手だあ。

桃中軒　馬鹿、今のおれぢやねえ、昔を考へ出してるんだ。

雲右衛門、わが懐を覗き見るやうな形にて、何か追憶に耽りゐる。藝者染次、盃をすゝめる。

染次　先生、御酒は。

桃中軒　うん。（顔を上げて盃を受けつゝ、率然として）　それ、何んたつけな、町の名よ。榮喜亭といふケチ寄席のある町よ。甚孝、それは知つてるだらう。

甚孝　知つてるかつて、ありや師匠、あつしの町内も同様さ。

桃中軒　棒振虫め！　町の名を……聞いてゐるんだ。

甚孝　（少しむツとして、横を向きつゝ）　鍛冶町〳〵。

桃中軒　然う〳〵、鍛冶町〳〵……。十何年の昔だ。（他の藝者六助に盃を與へつゝ）こいつ、その頃から厭味なやつでの、チラ〳〵友禪の長襦袢など蹴出して歩いたやつよ。好く榮喜亭の樂屋に來て、變なことをベラ〳〵喋つてゐたよ。

甚孝　へえ、こりや驚いた。師匠、何うして……。

桃中軒　知つてるさ。手前はあの横町の指物屋の悴だ。

甚孝　（襟を掻合はせて）　こりや驚いた　こりや少し驚いた。

桃中軒　お松ちやんと云ふ、こゝに黑子のある氣性者の娘があつた。

甚孝　師匠、お前さんは、お松ちやんを知つてますかい。

桃中軒　まだ思ひ出せねえか　はゝはゝ。おれはお前が、さつき座敷へ入つて來た時、一目見て直ぐ分つた。

甚孝　へえゝ、こいつは……。どれ、御顔容を……。

桃中軒　澤庵臭え、傍へ寄るな。

六助　（盃を雲右衛門に返しつゝ）　ぢや先生は、以前この土地にお居なすつたんですか。

桃中軒　分かるめえなあ……。甚孝でさへ思ひ出せねえ。

染次　確りなさいよ、甚さん。（とその肩を叩き）　お前さん、指嵌ひとつの大事な場所だよ。

甚孝　さればその事。身の上の大事とこそは……。

桃中軒　はゝはゝ。

雲右衛門、快然として高く笑はんとして、ふと蓋せられしやうに寂しく口を噤む。懐手のまゝちやぶ臺に頬杖ついて、ぢつと目前の一點を凝視する。

甚孝　待つて下さい、待つて下さい。ぢや大師匠……。

桃中軒（沈みたる聲）煩せえ、考へてゐるんだ。

甚孝（拳に指などピチ〳〵鳴らしつゝ）斯うつと……。その頃の榮喜亭を知つて、お松ちゃんを知つてゐなさるんだとすりや……。斯うつと……、斯うつと……。師匠、榮喜亭は七八年あとの大火事で燒けましたよ。御存知ですかい。

桃中軒　おらアあの席亭の樂屋に、轉つてゐたもんだ。

雲右衛門、突然、接穂もなく獨語のやうに云ふ。

藝者等その嚴肅なる聲に桃中軒の顔を見つゝも、「嘘でせう」「眞逆……。」など呟く。

桃中軒（同じ聲音）嘘なもんか、おらアその頃小繁と云つて……旅廻はりの、雜用宿（ざふやうやど）にも着けねえ身分だ。あの黴臭（かびくさ）せえ樂屋の窓から、夕方なんぞ、柿の花がホロ〳〵と土に落ちるのを

……妙に身に染みて眺めたもんだ。慥か柿の木の下に、石の井筒があつたつけ……。

甚孝　有ります〳〵、ありやお前さん吹井戸だ。

桃中軒（神經的に甚孝を睨めて）　死んだ兄貴に廻り合つて、又別れたのもこゝだつた。考へるとあれから十幾年經つたとは思はれねえ。つい昨日のやうな氣がすらあ。（寂しく笑ふ）

甚孝　それぢや何んですかい、師匠は誰方について……。

桃中軒　春日井の文之助爺さんについて來たこともありや、三河屋梅車に連れられて來たこともあつた。何しろ旅廻りの祭文語りの親父に別れたのは、九つの年だ。それから方々と……流浪もしたよ。はゝはゝ。おい、酒だ。

甚孝（手を叩いて）然う〳〵、それで思ひ出した。

桃中軒　何を云つてやがるんだ。はゝはゝ。

六助　然うですかねえ、そんな苦勞をなすつたんですかね。何しろ一流をお立てなさるんだものの、容易なことぢやないわねえ。

染次　ほんとですわねえ、姐さん。

桃中軒　關東筋に踏ン込んで來ると、木にも山にも昔が殘つてゐて、いろんな事を思ひ出すのよ。はゝはゝ。然うだ、こゝの淺間様だ、あの拜殿の控柱に……おいら十三四の時だらう、吉川小繁こゝを通る、書いた文字が殘つてゐるだらう。序の時に行つて見ねえ、ははゝゝ。酒だ。

雲右衛門、盃にてちやぶ臺を叩く癖あり。

甚孝　恐れ入つた、一言もねえ、あの時榮喜亭に燻つてゐたお前さんが、今日斯うして武士道皷吹、天下の雲右衛門になつて東京檜舞臺に乘込まうとは、豚に臍を嘗められても氣がつかなかつた。甚孝如きは豆腐の角に頭をぶつつけて死ぬべきところだ。（手を出して）御前、御介錯。（と盃を受ける

雲右衛門　醉ふほど感傷的になりて、頭をフラ〳〵させつゝ回想の快感に陶醉しゐる。これより二階宴會の鳴物、時々聞え來る。

六助　そして九州へゐらしつて、何年におなりになるんです。

桃中軒　うん？（問を忘れたやうに、暫く顏を見てから）八年。

染次　そしてその間、一度も東京にお歸りにならなかつたんですか。

桃中軒　うん……。足踏みされる……東京ぢやねえ。

六助　故郷に錦ツて云ふけれども、ほんとにそれ迄にお成んなさるのが、大抵ぢやありませんわねえ。

桃中軒　（ポカンとして、何か考へてる）うん……。

染次　藝道一心、だけど羨しいわ。

六助　定めてその間には、東京の方を向いて、今に見ろと云ふお心がおあんなすつたでせうねえ。

桃中軒　うん……。（肱枕してコロリと壘に寢る）

六助　あれ、誰か、お枕を。

桃中軒　何、好い。

雲右衛門、ムクと起上りて懷手のまゝ脇息に頰杖して、凝っと目を一點に据ゑる。やゝ長き間。

桃中軒　思ひ出すと、いろ〳〵の事がある。おれにはこの靜閑に、大事な恩人がある。おれが

今日天下の雲右衛門になつたのは、みな、その人のお蔭だ。甚孝、それ榮喜亭の二三軒さきに、お稲荷さんなど賣つてゐた鮨屋があるだらう。

甚孝　鮨米ですか。

桃中軒　うん、その鮨米だ。大きいものでくれ、その話をしよう。（急に元氣づいて起き上り、コップに酒を注がせつゝ）あすこの厄介娘に、お夏さんと云ふのがあつた。

甚孝　有ります〳〵、慥か久能の方の生れでさあ。

桃中軒　居るかなあ、今。

甚孝　居ますよ。慥かこの近所の……。然う〳〵、隣り町の活版屋さんへ片付いてゐますよ。

桃中軒　直ぐ會ひたくなつた。呼、呼んでくれないか。

甚孝　お夏さんをこゝへ？　呼んで何うするんです。

桃中軒　涙のこぼれるやうな昔話があるんだ。雲右衛門が會つて禮を云ひたい、感謝したいと然う云つてくれ。

甚孝　でも師匠、活版屋のお上さんが、この席へ……。

桃中軒　人間が人間に禮を云ふんだ。行つて來い。

甚孝　へえ（澁々と出て行く）

雲右衛門、急に元氣づいてコップにて酒を呷る。別人のやうに快濶なる調子となる。

桃中軒　さ、お前達、みな寄つて飲め。何か、手をつけろ、さ、小さい連中、何うだ。今お前達におれが泣ける話を聞かせてやらう。おれも泣く、泣く。うん、美しい話だ。何うだ、飲め、飲め。好い時に好い話を思ひ出したもんだ。はゝはゝ。

半玉甲　先生、だつて何も食べるものないわよ。

桃中軒　はゝはゝ、然うか。おれは何日もこれだ。それぢや、洋食を一皿づゝ然う云つて來い。

半玉乙　洋食は何にしませう。

桃中軒　何んでもいゝ、早く行つて來い。話が日增物になる。

半玉甲　先生、一皿づゝ。（と出て行く）

桃中軒　早く行け。その前におれの苦勞話からしなけりやならねえ。おれは五人兄弟だ。上に

兄貴が一人、下に三人弟があるんだ。今も云ふ通りに、九つの年に親父に別れて、兄弟五人散々だ。そのうち兄貴も何うやら半人前になつて、おれと一緒に淺草松葉町に家を持つた。お袋を一人養はなけりやならないんだ。その頃の話と云つたら、全く……目もあてられない修羅場さ。全く、われながら、あの間を……好く生きて來たと思ふ。おれの今日を爲したのは、貧乏だ、艱難だ。

雲右衛門、酒を呷りつゝ話す。過去の困難を話すほど、言語次第に生氣を加へて、潑溂たる調子になる。

半玉等、甚孝、ともに戻り來る。

甚孝　師匠、いま使ひをお夏さんへ出しました。

桃中軒　うん、好し、お前も飲め。何しろその頃は、後に洲崎にひけた遊廓が、まだ根津にある時分だ。兄の繁造と一緒に、おらあ毎晩、米の代を稼ぎに流しに行つたんだ。山下に寒月と云ふ汁粉屋があつて、あれから馬見所のところまでは……風がヒユウと鳴つて、吹ツ曝しの大難所だ。薄穢れた二子縞の袷に、二人ともろくな下着もねえ。裾を煽られて空ツ脚にパ

ラ〳〵と吹きつける砂ツ粒が、今に忘れず痛かつた。兄貴は小兒の時から病身で、咽頭が弱かつた。紫のハンケチを頸に卷いて、少し斯う……俯向き加減に、三味線を抱いて、兩袖を搔合はせてゐるみじめな姿が……目に見えるよ。（言語次第に感傷的になる）若くて死んだ、二十四だつた。兄弟中でも內氣な、氣の弱い性分で……思ひ切つておれ等に小言も云へない人だつた。兄弟のうちでも……おれは一番思ひ出すよ。（眼を開き）聞いてるか、皆聞いてるか。

甚孝　へえ、聞いてゐます〳〵。消えて入るさの……。

桃中軒　生來犬が嫌ひな人でなあ、一所に遊廓を流して歩くうち、ワンと云つてもおれの方へ寄つて來るのだ。大八幡の屋根に夜の霜が白々と下りて、月の冴えた深夜だつた。何んとか云ふ小格子の軒下で、國定忠次か何かを歌つてゐる時だ。兄貴の三味線が變に調子が狂ふから、ひよいと見ると、兄貴は斯う寄つて來て、何んだか斯う落付かないから、見ると……白犬だ。大きな白犬が……聞いてるか、おい。

六助　聞いてゐますよ、皆聞いてゐますよ。

桃中軒　舎さう。はゝはゝゝ。詰らねえ昔話だ。（酒を飲む）

染次　あれ先生、肝腎のところぢやないの。

六助　それから……？　何んですね、半途にして、先生。

桃中軒　止めた。お前達のやうな無神經には話しても駄目だ。

半玉甲　あら先生、眞面目に聞いてゐるのよ、先生。

同乙　聞かして下さいよう、先生、先生。

桃中軒　（興味なく、投付けるやうに）いきなり、おれは兄貴の三味線で、犬を撲りつけたんだ。

棹は折れる。胴は滅茶々々。それだけの話よ。（コップを臺に叩いて）おい、酒だ。

三味線引松月老人、手提鞄を持ち入り來る。

松月　これは……至極穩かでございましたねえ。

桃中軒　お爺さんか。又昔話が出ちやつたよ。はゝはゝゝ。

雲右衛門、片手に頭を抱いて極り惡るさうに高笑ひする。舊師松月に對する時は、常に一種小兒らしき羞恥と嬌慣とを帶ぶるなり。

松月　そりや好い、そりや結構だつた。（と藝者に盃をもらつて）そしてお前さん達、何んの話だつたね。

半玉甲　昔先生が、廓のなかを流して歩いた話なの。

同乙　犬を撲つて、三味線を滅茶〳〵にしたお話。

松月　そりや好い話を聞いた。末代にも傳はる話だ。お爺さん、ではその話を續けようか。うむ、好し〳〵、一盃。はゝはゝゝ。何がお前さん、その頃のこの人には、三味線一挺が生命道具だ。折れた三味線を二人で見て、兄と弟はホロリとした。大事の道具に別れては、明日からの露命がつながれねえ。兩方ともに言葉はなく、萎れ返つてトボ、と、松葉町に歸んなすつたが、お袋さんに三味線は見せられずよ、次の日は一日兄弟で……顏をそむけてゐたさうだ。

桃中軒　（突然口を出し）おれは何んとも思はねえのよ。兄貴の方が……おれの顏を見ないやうにして、小さくなつてゐるんだ。兄貴は十六、おれは十三だつた。

松月　するとな、この人、何を思つたか小錢をもつて駈出したもんだ。買つて來たのは小さな

木魚よ。默つてそれを兄さんに出すと、受取る方も默つて……弟の目を見た。一盃貰ひませうか。十六と十三の兄弟は、又その晩、何氣ねえ體で家を出た。兄貴が袖の下に、シツカリ掴つてゐたのが、件の木魚よ。叩く方も無言、歌ふ方も無言……その晩は夜つぴ　兄弟とも口を利かずに、根津の廓を流して歩いたと云ふことだ。それでこの人は今、その頃の苦勞を忘れめえために、千の木魚を集める發願をなされての、今でも變つた品さへ見りや、金にあかして集めておゐなさるのだよ。

六助　まあねえ……。

染次　ほんとに。（涙など拭ふ）

甚孝　師匠、そして鮨米のお夏さんが師匠の恩人とは、何うした譯なんでございますえ。

桃中軒　うむ。それを話すにや……この松月爺さんに、拾はれた時のことから話さなくちやならねえ。この爺さんはもと、春日井一家で文之助と云つて鳴らした人だ。

甚孝（膝を進めて）是ツ非。

桃中軒　爺さん。おらあ何んだか、東京へ行くのが厭になつたぜ。

松月　はアてね。

桃中軒　出來るもんなら、おらア昔の小繁でいゝや、お前さんに追ひ使はれて、幟蒲團にくるまりながら、もう一度旅廻はりがして見てえよ。

松月（雲右衛門を憫れむやうに見て、寂しく笑ふ）はゝはゝ。

桃中軒　本當だよ、爺さん。おらア、急に身の周圍が煩さくなつたんだ。何が桃中軒だ！　何が雲右衛門だ！（ゴロリと疊に寢る）おらア昔、貧乏してゐた時の方が、どの位懐しいか知れやしねえ。本郷の話なんか、極めるんぢやなかつた。

松月　はゝはゝ。

先程の事務官留岡、女中お清のとどめるも聞かず、醉つて入り來る。その後より土地の新聞社長石田賢造、紡績社長西川某など續きて來る。

お清　まあお待ち下さいまし。御都合を伺つて見ますから。

留岡　大丈夫だよ。先刻約束が濟んでゐるんだよ。

お清　ですけれども……。

留岡　大丈夫〳〵。福岡以來の親友だ。おい、親友、親友。（蹌めきながら廊下を入り來る。）

桃中軒　（兩手を後頭部に置き、天井を仰ぎながら）　ねえ、お爺さん、あたしや死んだお上さんには可愛がつて貰ひましたよ。大勢の弟子のなかでも、夜中に起きて來て、寢相を直してもらつたのは、恐らくおれ一人だらう。

松月　（手酌で飲みつゝ）　お前さんも又、あれの賴りになつておくんなすつた。

留岡　おい桃中軒、雲右衛門。

桃中軒　（聞えぬ態にて）　お上さんは、ねえ、虫齒でよく苦しんでゐたつけ、お前さんは飲んだくれて構はないし、おれが氣がついて、野蒜の根を堀つて持つてあげると、悦んでゐなすつたよ。

松月　不人情なおい等さ。はゝはゝゝ。ろくにお醫者にもかけなかつたよ。はゝはゝゝ。

桃中軒　と云ふのが、外にいゝのがあるからさ。知つてます、知つてますよ。はゝはゝゝ。

松月　あれは全く濡衣だ。あの頃はそれどころぢや……。

桃中軒　いんえゝゝ……。（指差しゝて、笑ふ）　はゝはゝゝ。

留岡　僕だ、桃中軒。明けろ。（障子の外へ來る）

桃中軒　然しお爺さん。お上さんはお前さんに惚れてゐたよ。あれまで邪慳にされても、やつぱり何處か好かつたと見える。

松月　（顏を平手に撫でゝ）　年寄に冷汗をかゝせなさんな。（飲む）

桃中軒　はゝはゝゝ。（快く笑つて）　けどその頃の文之助と云へば鳴らしたもんだ。それ掛川の宿にかゝつた時よ、なあお爺さん。

留岡　（障子を明けて）　雲右衛門、無禮だらう。何故返事をしない。

桃中軒　（ヂロリと留岡を見て）　桔梗屋と云つたかねえ、あの宿は。あの頃はいくらかおい等も、割を貰はれる頃だつた。夜、揚錢を洗つて見て、お前には十二枚、大抵天寶錢にきまつてゐたもんだ。はゝはゝゝ。

留岡　雲右衛門、知事公が待つてゐられるんだ。紹介しよう。

留岡、室内に來りて雲右衛門を引張る。

桃中軒　（手を振り拂つて）　貴公は？

留岡　留岡だよ　君の藝の崇拜者だ。知事も師團長も一席聞きたいと云ふんだ。大に遣つてくれたまへ。

桃中軒　（案外に冷靜に）　勘辨してくれたまへ。今師匠と、昔話をしてゐるところなんだ。（松月に）だが、あの頃の天寶一枚は有難かつたねえ　晝の惣菜に竹輪が一本買へましたぜ。

松月　うむ、掛川の竹輪と來ちや、まづい竹輪でなあ。

桃中軒　一本八厘だ　甘いまづいが云へるけえ。

松月　本當だ　はゝはゝ。

この前より幇間甚孝、藝者六助など立ちて、切りに留岡を宥めてゐる。

留岡　桃中軒。君は閣下等の前で歌はれないのか。僕は引受けて來たんだ。僕の面目を何うしてくれる。

桃中軒　僕も今日は客なんだ。まあ、歸つてくれ給へ。

留岡　藝人の癖に生意氣な……。何が何んでも長官の前で唄はして見せる。來い。

桃中軒　田舍縣知事が何んだ、おれも天下の雲右衛門だ。

留岡　何、こいつ——。

留岡、摑みかゝらんとす。人々それを止める。

桃中軒　御祝儀に尻ッ尾をふつて、座敷をかせぐやうな雲右衛門ぢやねえ。おれの藝が聞きたけりや、袴をはいて出直して來い。知事でも師團長でも、藝の前には頭を下げさして見せるんだ。へぼ役人め！

留岡　畜生！

留岡、かつとして又躍り入らんとするを、石田、西川兩人にてとめる。

石田　（留岡を抑へつゝ、桃中軒に向つて）君、君、今名刺を出すが僕は石田と云つて、土地の新聞社の社長だ　留岡君は醉つてゐたが、決して惡意ぢやないんだ。君のために大に斡旋の勞をとつてゐる人なのだ。

留岡　畜生、歌はないうちは承知しない。歌はして見せる。

石田　これ、君、君も可けないよ。（と留岡を抑へつゝ）兎に角、君、雲右衛門師、氣持よく一緒に飲まうぢやないか。酒が醒めて、相互に後悔するやうでは面白くないよ。

桃中軒　折角だが、厭だ。田舍役人どもに聞かせるには、些つと藝が惜しいんだ。裸で歌つてもおれの藝は一聲千兩だ。

石田　然う角目立つては困るよ。君を藝人として呼ぶんぢやない。紳士として國士として、一同が歡迎しようと云ふんだ。一緒に、心持よく醉はうぢやないか。

桃中軒　それは君の想像してゐる雲右衛門に求めるがいゝ、僕は厭だ。

石田　（少しむつとして）君も損だよ、愛嬌がなさ過ぎるよ、藝人らしくないよ。はゝはゝゝ。

桃中軒　何？（起き上らんとする。松月、抑へる）

石田　なる程、國士だ、武士道皷吹者だよ。然し看板を上げて、木戸錢をとりや藝人だ。少し損と得を知るが好いねえ。

桃中軒　何んの權利あつて、君等は僕の清興を妨げるんだ。僕は今、雲右衛門を忘れ、桃中軒を忘れて……一人の人間としての過去の感情に涵つてゐるところなのだ。虚名や、名聲などは、脱ぎ棄てた草鞋よりも價なく思はれる日があるものだ。（次第に眸を沈めて）人間が或る時、われにもない細々としたところになつて、靜かな自分を見詰めようとする、その靜寂を

破ると云ふのは好くないことなのだ。

石田　惡るかつた、惡るかつたよ。失敬する。增長慢め！

石田、西川、暴れ入らんとする留岡を無理に連れ去る。藝者等、甚孝、共に送り出す。

この騷ぎの間も、松月は手酌に呷りて、次第に醉を發しフラ〳〵しゐる。雲右衛門、又仰向けに疊に寢倒れる。

泉水に落ちる水聲聞えて、やゝ長き間あり。

松月　然し、お前さんも年だ。悐え性のついたのには感心した。

桃中軒（仰向のまゝ）お爺さん、おれも三十七だよ

松月　然うなんなすつたなあ……。思ひ出すとお前さんにも、隨分いろ〳〵のことがあつたなあ……。

桃中軒　うむ……

松月　國府津のあれは幾つになる勘定だ。

桃中軒　十六だとよ。

松月　然うかなあ……うむ……。

甚孝、慌しく駈け來る。

甚孝　師匠、來ました〳〵、お待かねの恩人が來ました。お夏さんが來ましたよ、師匠、師匠。起きて下さいな。鮨米のお夏さんが、美々しく盛裝してやつて來ましたよ。

桃中軒　（寢倒れたまゝ物憂げに手提鞄を松月に投げて）お爺さん。いゝ加減はからつて、歸してやつて下さい。

松月　おいよ。

甚孝　師匠。ぢや會はないんですかい。折角呼び立てゝ置いて、お夏さんに會はないんですかい。

雲右衛門、無言。雨降るやうな水聲を聞きゐる。

松月　（銀貨と紙幣をまぜて）ぢや包まねえよ。五兩ある。

甚孝　可けませんよ、そいつは困る。折角着物まで着換えさせて呼び立てながら、會はれないぢやあたしが立たねえ。師匠、それぢや使に立つた者が困りますよ。

桃中軒　ちよつ、煩せえなあ……。

甚孝　お爺さん、何んとかして下さいな、それぢや甚孝、合はせる顔がなくなつてしまひまさあ。お爺さん。

松月　可いんだよ。五兩ありや……日當にはなるよ。

甚孝　可けません〳〵。恩人だの感謝するのつて、散々悅ばせて置きながら、來た者に會はないぢや、恥をかゝせるやうなもんですよ。お爺さん。

松月　（フラ〳〵しつゝ）恩人だ……？　誰が恩人なのだよ。

甚孝　誰がつてあんた、極つてゐまさアね。師匠が前座時代に、鮨米の娘さんに恩をうけて……。

松月　うむ、その話かい。（クス〳〵笑ふ）まあ……好いよ。

甚孝　些つとも好かアありませんやね。お夏さんの方ぢや、まるで覺えはねえけれど、折角然う云ひなさるんだからつて……。

松月　時たまあんなことを云つて見なさるんだ。時の座興だよ。

甚孝　おや、何んですつて。

松月　そりや斯う云ふ話だよ。大將がまだ觸れ太鼓を叩いて、毎日町廻りなどする時分、煙草錢にも困つてゐるのを、何んとか云ふ鮨屋の娘さんがよく慰めてくれて、その頃はやりのヒーローとか云ふ煙草を一二度持つて來てくれたと云ふ譯だ。そして云ふには、お前さんの藝には見込みがある、何うか、出世して下さいよと云つたと云ふ話は、時々この人に聞いてゐる。大方その話でも思ひ出しなすつたのだらう。

甚孝　たつたそれだけの話なら、恩人も感謝もないぢやありませんか　ざらにある事つた。

松月　だからよ、時の時勢でそれを恩人に思つて見たり、いろ〳〵話を諄くして見ないぢや、酒がうまく飲めないよ。その時次第に聞いてゐりや……それで好いんだよ。さあさ、早く、歸した〳〵。

甚孝　豪勢の惡りい役に、廻つたもんだあ……

甚孝、ブツ〳〵呟きながら、金を持ちて去る。

夜深けて泉水の水聲、急に立ちて聞ゆる、松月老人はちやぶ臺に凭れて、又ふら〳〵居睡る。

松月　（時々目を覺まして）先生。寒くはありませんかい……。（間）春先の陽氣は、急に冷えて來るもんだ……。（又目を覺して）先生。兎に角檜舞臺に上るんだなあ……。おい等の師匠株の人達が聞いたら……（睡る）何しろ、おれは生きてゐて好かつたよ……。生きてゐるのは有難い、有難いことだ……。（睡る）先生、好い男、風引くよ……風引くよ……先生……。

松月老人、ちやぶ臺に突ッ伏して睡る。

春の夜の月、靜かに疊に射し入る。雲右衛門の妻お妻、女中に案内されて入り來る。二人の姿を見て、女中に何か囁く、女中、搔卷を持ち來りお妻に渡して去る。

お妻　搔卷をそうッと良人にかける。雲右衛門、目を閉いてお妻を見る。

お妻　（勞はるやうに目を伏せて）やはり……眠れないでせう。

桃中軒　うゝ（と沈みたる聲）苦勞をかけるなあ……。おれは何んだかこの世に、休らひの寢床がなくなつたやうな氣がしてならない……。

お妻　え……？

桃中軒　汽車のなかは苦しかつた。（拳に額をあてゝ俯伏す）

お妻　あたしも……苦しうございました。（悲しげに俯向く）

桃中軒　八年前沼津の停車で、汽車の窓から二人で……あの富士山の雲を、凝つと見たつけ……。

お妻（思はず叫ぶ）あゝ……。

桃中軒　云つてくれるなと云ふのか。然し、云ふのがつらいか、云はないのがつらいか……それも分らないよ。

雲右衞門、はつと溜息。お妻、頂垂れて動かず。

泉水の音。

この時、宴會歸りの姿にて、人々暴れ狂ふ留岡事務官をとゞめながら出て來る。

留岡　歸るよ、歸るとも、無論歸る（と云ひつゝ姿を顯はす）　たゞ、たゞ一言あいつに聞かせてやるんだ。大丈夫だ亂暴なぞしない。（と障子際に來り）　雲右衞門　君の見識は流石に偉いもんだよ。然し、人間の見識には本質が供ふぞ　貴樣は何んだ、白晝公然東京の町を歩ける體か。不德漢め！

雲右衞門、思はず立ち上らんとする。お妻、その手に縋りて、目にて訴ふる。

留岡　貴樣は何故八年前に東京を追はれて、西國に放浪する身になつたと思ふ　その罪は消えてゐるか、その罪は贖はれてゐるか。師匠に叛いた背德者、忘恩者め！　制裁はあるぞ、必ず世に制裁はあるぞ。增長慢！

留岡、罵倒して人々と共に去る。やがてドッと笑聲聞ゆる。雲右衞門、袴を摑んで悩ゆる。

お妻、啜り泣く。二人は目を合はせて、暗然として頂垂れる時、前場の倉田楚水、急しく入り來る。

倉田　何んだあいつら。田舍酒に食ひ醉やがつて。どつちが近眼だ、氣をつけろ。（振返つて怒鳴りつゝ、室内に入り來る）何うしたんだ、何かあつたのか。

お妻　いゝえ。何んでも……ございません。

倉田（雲右衞門の前にどつかと胡坐を組み）さ、桃中軒。何うするんだ、何うするんだ。

桃中軒　何んだ。

倉田　おれの拳骨が、ポケツトに入つてゐるうちは好いぞ。明日を何うする氣か、それを聞かう。貴樣はそれ程の卑怯者、臆病者なのか。東京がそんなに恐しいか。

桃中軒　誰が東京を恐れた。おれはおれのなかに有るものを恐れた場合はあつても、決して東京など恐れはしない。

倉田　それならば、何故汽車を下りた。

桃中軒　貴様などに……この心持が分かるものか。

倉田　こいつ――。おれに分らないと云つたな。こいつ。（對者の手を握り、振りて）おれに分らないと云つたな。こいつ、こいつ――。おれに、分からないと云つたな。

倉田、雲右衛門の手を握り、目を見詰め、聲に涙を帶びる。

桃中軒　（次第に勇氣を加へ、昂然として）おれも雲右衛門だ。お前などの尺量（ものさし）には量られたくねえ。おれはたつた今、傷だらけのまゝに生きようと決心してゐるんだ。

倉田　明日東京へ乘り込むな？

桃中軒　無論だ　明日の一番で靜岡を發（た）つのだ。

倉田　それで好い、それで好い……それだけで好い。

倉田、雲右衛門の手を額にあてゝ涙含む。

松月、目覺ます。欠伸せんとして慌てゝ止める。

倉田　それなれば君に、會はせたい者がある。會つてくれ。

桃中軒　（茫然として）泉太郎を連れて來たのだらう。

倉田　然うだ。心配して今國府津から駈けつけたのだ。

桃中軒　……

倉田　君は何んで急に、泉太郎に會ふのが苦しくなつたんだ。小兒の身にもなつて見給へ。八年ぶりに待ち焦れてゐた父が急に靜岡へ下りて、自分は今夜、國府津に寢てゐられるか。見ろ、小兒心にオロ〳〵して、おれと一緒に父の座敷へ入りかねて……そこに、そこにションボリ立つてるぞ。小兒に何んの罪がある、置去られた泉太郎に何んの罪がある。

桃中軒　おれは、おれは……傷だらけの姿を自分の子だけに、見せたくなかつたのだ。小兒のこゝろは……兩親の姿を完全なものに見たがつてゐるのだ。

倉田　會ふか、會はぬか、何うする。

桃中軒　呼んでくれ。

倉田　泉太郎、泉太郎。

雲右衞門の實子、瀨崎泉太郎、入り來る。十六歳、美少年。中學生らしき和裝。無言にて坐る。

倉田　そこに居るのは親父だ。お辭儀しろ。（指差す）

泉太郎、頭を下げる。

桃中軒　（頸を前に出して）泉太郎。顏は……覺えてるだらう。

泉　はい。

桃中軒　覺えてゐるな。覺えてゐるな。

泉太郎　（俯向いて）覺えてゐます。

桃中軒　倉田。おらア……飲みてえなあ。

倉田　好からうとも、大に飲め。今夜は夜通し、底拔け騷ぎして飲まう。おい〳〵藝者を呼べ、藝者。（手を叩く）

雲右衞門、コップを取る。お妻、注ぐ。

桃中軒　泉太郎。（お妻を指し）この人をお前に引合はせるのは、今日でなくしてくれよ。いづ

れ引合はせるぞ。

泉太郎　（伏目に）はい。

桃中軒　學校へ行つてゐか。二年だな。

泉太郎　はい。

藝者連、太鼓持甚孝など浮かれ立つて入り來る。

桃中軒　（突然）爺さん、悴に聞かせたくなつた、引いてくれないか。

松月　おい來た。（と三味線を取上げる）

倉田　桃中軒、久しぶりに聞くぞ。

桃中軒　（胸を叩いて）氣持よく唄はねえぢや、こゝが詰つてゐるやうだ。（唄ひ出す）卯月も去りて五月雨の、昨日も今日も搔き曇り、降りみ降らずみ定めなき、頃は節句を明日にした、五月四日の入相時……。（片手に三味線を止めて）泉太郎。

泉太郎　は

桃中軒　親父の體は傷だらけだぞ。お前の親父は傷だらけに生きて來たのだぞ。虛名や評判に

惑はされて、おれを買被つてはならないぞ。（唄ふ）　シヤア〳〵と降る雨の中、笠もかむらず頭から。グツショリ濡れた濡鼠。山門くゞり正面本堂。左り手なゝめによる。冷光院殿墓前を過ぎ、グルリ廻れば四十七士の墓どころ、一際目に立つ大石の墓前に坐はる村上喜剱……

泉太郎。

泉太郎　はい。

桃中軒　おれの親父さんは、上州結城在で、吉川繁吉と云ふ旅廻りの不見目な祭門語りだ。雲右衛門はその悴だぞ。好いか、お前の親父は傷だらけの男だぞ。（唄ふ）　周圍はシン〳〵寂寞として、松も柏も生ひ茂り……風さへ通さぬ泉岳寺の墓地、折から聞ゆる梟の聲、今うち鳴らす鐘の音は。ありや本堂の勤の鉦……。

雲右衛門の聲、次第に悽愴にして悲痛を加へ、時に咽ぶやうなる涙聲となる。聞きゐる人々もその嚴粛に打たれて、膝を正し頂を垂れて聞き入る。

靜かに、幕。

第三幕

時——明治四十一年の秋、十一月の或る日。

處——新橋竹の家、待合業。

小庭に面してその家業らしき洒落たる建築、椽側つき二間ほどの室内を見る。小庭には立木二三本、鉢前、蹲ひの蒼石あり。敷松葉。室の一方は雲右衛門の居間となり、朱檀の大机を置き、虎の皮など敷く。床の間あり。額面裝飾など總て彼の嗜好を顯はす。中央に彼自身の肖像畫を掲げたり。椽側つゞきに上手は目下建築中の中二階あり、目下工事中なり。職人立ち働きて、時々鐵鎚の音、鉋の音など聞え來る。

小春日の穏かに明るき日にて、椽側には秋草又は白菊などの大鉢を置く。即ち、前場より一箇年半ほどを經過せるなり。

幕明く。桃中軒雲右衛門・寢起らしき溫袍姿に赤きネルの寢間着を襲ね、十種ほどの新聞を前にして煙草（金口）をくゆらしつゝ讀みゐる。尤も彼はたゞ自分に關する記事を神經性に探し求むるのみにて、他の記事を讀むことは殆んどなきなり。その傍に支配人磯野一石・數十通の郵便物を開いて、赤鉛筆にて記號しつゝ整理しゐる。一石、四十位。でつぷりと肥滿して、邊幅などに注意せぬ豪傑風の男。顏に似合はず小兒らしき笑聲をなす。

桃中軒　（ふと耳を立て）泉太郎がゐるやうだな。今日も學校を、休んだのかい。

磯野　は……（と口籠りて）少し、風氣でもありますか……。

桃中軒　然う怠けては、仕樣がないなあ。みつちり叱つてくれなくちや困るよ。（新聞に目を移しつゝ呟く）何うもあいつは、柔弱なやうだ。……

磯野　まだ小田原中學から轉校早々で、學校そのものに馴染がつかないんでありませう。

桃中軒　餘り友達がないやうだね。

磯野　あの年頃にしては、少し內氣過ぎますかね。

桃中軒　畏縮けてるよ。

磯野、書面の一通を讀みて突然愉快さうに笑ひ出す。

桃中軒　何んだ。

磯野　例の關西婦人會ですがね。や、書いた〳〵。はゝはゝゝ。會長の直筆で、途方もなく擔ぎ上げて來ましたよ。

桃中軒　何んだ、一度ひとの人格を疑つて置きながら。

磯野　それだから猶ほ以て、こんな齒の浮くやうな事を書くんでせう。桃中軒のために總會を開くやうなことを云つてますよ。

桃中軒　厭だな……みな錢だ。（新聞を見る）

磯野　（他の一通を聞き見て）先生、あなたこんな約束をなすつたのですかい。芝の岡園さんですよ。

桃中軒　何んだつけな……。

磯野　芝公園の地面を五萬圓で買ふなんて……。

桃中軒　然う〳〵。何日か醉つて、そんな話をしたやうだ。

磯野　こんな話は、一度私に聞かして下さらなくちや困りますね。先方ぢやスツカリ信じきつて、明日にも登記になるやうに思つてゐるやうでありますよ。

桃中軒　酒ぢやツイ失敗じるよ。何んとかならねえかな。

磯野　神田亭の方もありませう。先生、大變ですよ。

桃中軒　何んとか、押繕らつて置いてくれないか。今更どうも、おい等だつて、斷れるもんぢやねえ。

磯野　話を七分で止めて置いて下さりやいゝんだが、先生のは、醉ふと十が十まで突ツ込んで話をつけてあるもんだから、誠に工合が悪いんだ。番頭泣かせですよ。

桃中軒　は〳〵は〳〵。

磯野　それは然うと、力ちやんは何うしました。もう歸つて來て、好い時分でせうがねえ。

桃中軒　何か云つてるんだらう。（少し顏を曇らし）返事のしやうがなくつて、力公、困つてゐ

るんぢやないか。

磯野　奥様は、今日もお歸りなさらないんでせうかね。

桃中軒　（庭の一點を見詰めて）お妻には、何か……根があるんだよ。

磯野　根と云へば……深川の一件でありませう。

桃中軒　可哀さうに……。おれが女の一人や二人つくたつて、それでもつて不貞腐れるやうな女ぢやないよ。外の源因だ。

磯野　然し今日の紅葉館の講演は、上つ方の御臺臨もあつて、迂濶にならない御座敷でございませう。

桃中軒　何アに、松月爺さんの三味線で間に合はして置くさ。

雲右衛門、輕く言紛らすうちに寂しき色あり。

磯野　先生。御夫婦なかのことだから……實は、遠慮してゐましたが、奥様は何うしてこの月になつて、急に席をお休みなさるんです。人氣にかゝはりませう。

桃中軒　（不快さうに口を尖らし）病氣だと云ふもの、仕方がねえや。

磯野　（反省を促がすやうに）先生、こいつは……。

桃中軒　おい等もう……誰の三味線だつて歌ふよ。（明かに苦惱を見せて）何あに、最う、好いんだ。

磯野　やツぱり深川です。先生の遣り方が餘り露骨過ぎるんで……實は家内とも然う云つて、心配してゐました。

桃中軒　今日の都新聞にも出てゐるよ。はゝはゝ。

磯野　え、千鳥さんのことが出てゐますか。どれ……なるほどこれを御覽なすつては、こりや今日は歸られない。

桃中軒　磯野。（冗談らしきなかに熱心なる眸）お前さんこの頃のおれの藝を何う思つてゐる。

磯野（新聞を讀みつゝ）何うと云つて、別に……

桃中軒　（少し膝を進め）氣がついたことがあるなら云つてくれ。正直に云つてくれないか。

磯野　さあ……。

桃中軒　尤も君は、九州時代のおれをタンと聞いてゐないからだが……正直、倉田なんか蔭で何う云つてゐるね。

磯野　先生。何か、氣になることでもありますか。

桃中軒　いや然うぢやないが……。（と笑ひに紛らしつ）お妻がぷいと家を出て向嶋へ行つて、三日も歸らないから、野郎、藝に愛措をつかされたんぢやないかと思つたのさ。はゝはゝ。

磯野　けれども……然う云つても、奥様だつて女ですからねえ。こんな新聞を見ると、餘りいゝ心持はしませんよ。それにこの頃、お體が何んだから……餘計、何んでございます。

桃中軒　そんなら手前、若くなるが好いぢやねか。

磯野　え。

桃中軒　おらあ千鳥と遊んでると、その日の聲に艶が出るやうだ。

磯野　云つては何んだが……出場所が出場所ですからねえ、先生の何としては、些と何うも……。はゝはゝ。

桃中軒　餘計なお世話だ。おりや氣に入つてゐるんだよ。

磯野　まあ例へ氣に入つても、ですねえ……。はゝはゝ。

桃中軒　（やゝ神經質に）何――？　（と對者を見詰める）

磯野　餘り公然と、家へ引入れることは何うかと思ひますねえ。いろ〳〵弟子どもや……若い者もありますからね。

桃中軒　千鳥は近々にあつちを引かせて、何處かこの土地で、看板のいゝ家へ預けようかとさへ思つてるんだ。それに何か、苦情でもあるかい。

磯野　いゝえ、別に、苦情なんてありませんよ。

書生塚本　入浴の用意して來り、廊下に蹲む。

桃中軒　（立上りつゝ）磯野、おれの藝は生物だと思つてくれ。雲右衛門は聲を人に借りて來て歌つてゐるんぢやねえよ。

磯野　へえ、畏りました。（書狀を整理しつゝクス〳〵笑ふ）

雲右衛門、一度去り、又何か云はんとして廊下口まで戻り來りしが、やがて舌打して去る。

飼鳥らしき頰白の鳴音聞ゆる。瀬崎泉太郎、入り來る。何んとなく憂欝なる顏色にて、ものを恐るゝ風あり。內氣らしく廊下に立つ。

泉太郎　磯野さん、お父さんは。

磯野　（書狀を讀みつゝ）今お風呂です。お入んなさい。

泉太郎　昨夜も遲かつたんですてねえ、磯野さん。

磯野　明方でしたよ。よく體がつゞくもんですよ。

泉太郎　お母さんの病氣のこと、何んとも聞きませんねえ。

磯野　然う〳〵。あなたは鈴木病院へ行つて、院長に會つてゐらしツたのだね。院名は何んです。

泉太郎　大したことはありません。少し……氣管が惡いんです。

磯野　（氣が付いて）立つてゐないで、お入んなさいな。

泉太郎　えゝ。

磯野　お父さんも蔭では心配してゐられますよ。少し、勇氣を出すんですねえ、學生らしく活潑にするんだ。お入んなさいよ。

泉太郎　えゝ。（遠慮深く入り來り、そこにある新聞など見る）

磯野　あなたも天下の雲右衛門の子だ。少し豪膽にやるんですね。學校なぞへ行つても、少々人を搔き分けて前に出るやうでなくては、當節は駄目ですよ。お父さんがあなた位の時の心掛けなど聞くと、苦勞もなすつたが勇氣もあつたよ。

泉太郎　僕は、駄目なんでせうねえ……。（俯向く）

磯野　自分からそんな正札をつけちや駄目だ。はゝはゝ。志を立てるんですよ。人間の處生には立志が第一だ。何おれも親父に負けるもんかと、慨然として發憤するんですよ。古來の傑士はみな然うだ。學校は何うして面白くないんです。

泉太郎　面白くないなんて譯ぢやないけれど……昨夜、少し考へ事して、眠られなかつたんです。

磯野　それが不可ませんよ。今から眠られないなんて年ぢやない。どん〳〵眠らなくちや可けませんよ。それにお父様の前に出て、餘り遠慮過ぎますよ。

泉太郎　えゝ……、

磯野　構はないから、思ふ事はドシ〳〵云つてやるんですよ。お父さんと云ふ人は、却つてその方を悦ぶんですよ。あなた、お小遣がありますか。

泉太郎　えゝ……有ります。

磯野　お小遣がほしい時は、遠慮なくお父様にねだんなさいよ。私から氣をつけて上げてもいゝが、それぢや却つて可けない。直接お父様に然う云ふがいゝですよ。この頃もあなた、教科書とかで不自由してゐたと云ふぢやありませんか。そんな馬鹿なことがありますか。

泉太郎　あれは後で、お母さんに買つて貰ひました。

磯野　お父さんと云ふ人はね、遠い垣の外の他人のことは氣がついて、身内や近い者のことには、不思議に氣のつかない人ですよ。倉田さんが好く云ひませう。雲右衛門はこゝから越して、向うの者にばかり金を使ふ、あの通りですよ。

泉太郎　磯野さん。お父さんはこの頃何うしてあゝ……お母さんの前を恐れるんでせうねえ。

磯野（對者を見て）あなた、そんな事氣がつきますか。

泉太郎　えゝ。昨夜もそんな事……考へてゐたんです。

磯野　そいつは可けないな。はゝは〳〵（カラ〳〵と笑つて）そりやあんたの考へる事ぢやな

い。お父さんにも、お母さんにも、長い過去といふものがある。それ迄はあなたの考へゞき領分ではありません。

泉太郎　然うぢやないんです、その事ぢや　…ないんです。

磯野　何んです。

泉太郎　お父さんはお母さんの病氣を……かなり重く考へてゐるんぢやないでせうかねえ。

磯野　（何んの氣も付かず、書面の整理を終りつゝ）　そんな事はないでせう。事實氣管支ぐらゐの病氣は、前にも一度お有んなすつたさうだから。

泉太郎　然うでせうかねえ……（俯向いて新聞を讀む）

磯野　坊ちやん。兎に角あんたは學生だ。學校のことゝ遊ぶことより外は、餘りいろ〳〵のことと考へないがいゝですよ。お父さんはあゝ云ふ天才的氣分の人で、他人の干渉や束縛を極端に嫌ふ方ですからね、餘り周圍から彼是云つてはなりません。自由、强情、我儘、みな雲右衛門の藝術をつくる糧なんですよ。決して天才藝術家に道德倫理の完成を求めるもんぢやありませんよ。

泉太郎　えゝ、それは知つてゐます。

磯野、書面や書類を小さき葛籠（つゞら）に入れて去る。

泉太郎、青年らしく足など少し横に出して、新聞類を讀む。鉈の音、頰白の鳴音。

泉太郎、ふと都新聞に出たる父の艶種記を見てハツとする。慌てゝ新聞を懷に入れる。やがて又その新聞を取出して、膝の上に皺を伸しながら、恐る〳〵讀む。嘆息。書生塚本（襷掛）と右田某、座敷掃除の箒など持ちつゝ入り來る。

塚本　坊ちやん、坊ちやん〳〵。新聞を見して下さい。

泉太郎　（都新聞を後に隱しつゝ立つ）　そこに有るよ。

書生二人、互に目にて囁き合ひつゝ新聞類を探がす。

右田　これぢやない。都新聞ですよ、都はありませんか。

泉太郎　知らないよ。

塚本　そんな意地惡るい事云はんと、ちよつと見して下さい。

泉太郎　（頸を振りつゝ）　知らない……知らないよ。

塚本　そこに持つてゐるぢやないですか。見せたつて好いでせう。
泉太郎　（急に奮然として）　君等、何んのために新聞讀むんだ。
塚本　何んの爲めと云つて毎朝讀む習慣だから讀むんです。ちよツと見せて下さい。
泉太郎　見せない。君等なんか……新聞讀まなくともいゝ。
塚本　可笑しいこと云ひますね。僕等だつて新聞は讀みますよ。
泉太郎　讀まなくともいゝ。（叫ぶ）
塚本　何故ですか。
泉太郎　（やゝ狼狽しつゝ）　君等、一體……生意氣だ。自分の、自分の職務をつくしたら、それで、好いぢやないか。
塚本　新聲を讀んでは何うして可けないんです。
泉太郎　可けないつたら可けないんだ。書生の癖に。
塚本　（むっとして）　そんな無法な話はありません。
泉太郎　（涙聲になつて）　君等は、いつも、僕を、馬鹿にしてゐるんだ。

塚本　何を馬鹿にしました。
泉太郎　何い。貴樣。
塚本　何んです。
右田が止むるも聞かず、癇癪もちの塚本は聞かずして、進み出る。泉太郎・前後を忘れて組みつく。
兩人、取組み合ふ時、雲右衞門・浴場を出て來る。
桃中軒　塚本、何をしてゐるんだ。塚本。
塚本　（雲右衞門を見て驚き、手を放す）　は……。
桃中軒　小兒を相手に、何をするんだ。怪我したら何うする。
塚本　は。新聞を借りようと思つたんです。
桃中軒　新聞？
塚本　語路合せの縣賞を見ようと思つたんです。すると、馬鹿にしてるの、反抗するのと仰しやるんです。
桃中軒　（泉太郎に向つて）　何故新聞を貸さないんだ。

泉太郎　（泣きながら）　失敬なんです、全體、失敬なんです。

塚本　坊ちやん。僕いつあなたに失敬なことしました。たゞ、都新聞を貸して下さいと云つただけぢやありませんか。

桃中軒　（泉太郎を見詰めつゝ、突然大聲に）　馬鹿者、泣くな！　何を泣く。それだからお前は、柔弱者と云ふんだ。

書生等、泉太郎、その劍幕に驚く。

桃中軒　人間泣くと云ふのは、訴へることなんだ。他人に憐みを求めることなんだ。泣いて相手に手を引かせるのは、爭ふべき權利を自分から棄てるやうなものだ。泣くな、見たくでもない、泣くな。

泉太郎　……。（悄然として俯向き、嘘晞する。）

桃中軒　貴樣はおれが九州放浪中、國府津のお時の家に預けられて、女ごものなかに育つて、男の氣慨を失つてゐるんだ。世間や外聞を恐れて、ものを包み隱さうとするから然うなのだ。何故善惡ともに大手を振つて、世間のやつ等に素ツ裸なところを見せてやれない。おれは、

おれは然うだな。横からでも縱からでも、雲右衛門は尻の穴まで人に見せる氣である。高が新聞記事ぐらゐで、人間の館打に影響されるものか。（書生等を見て）　何を聞いてゐる。早く用事をやつてしまへ。

書生等二人、去る。

桃中軒　（ふと膝を進め、聲を潜めて）泉太郎。お前福岡へ行つて見る氣はないか。福岡には玄洋社の諸先生達も殘つて、男の氣慨を養ふには最も適當な土地だ。わしから賴めば、皆悅んでお前を引取つてくれる。然うせい、あん、然うして見る氣はないか。

泉太郎　……。

桃中軒　將來男子が世に立つに、弱いといふことが一等の缺點だ。おれなどが今日まで生きて來たのは、たゞ一つ强情と我慢だ。この氣力がなかつたら、おれなどは疾うに……何處の並木の下に倒れてゐたか知れないのだ。天眼先生がよく歌つたが、人生行路の難。險岨を越えて又險岨あり……その通りだ。（泉太郎の肩を握り）　こんな、こんな弱い肩ぢやいかん。一生

の重荷を負ふのにこんなこんな柔かな手ではいけない。（泉太郎の又急に涙含めるを見て）何うした、何んだ。

泉太郎　（父の顏を見てから）いゝえ、何んでもありません。

泉太郎、何か、はんとして能はず、弱々しく俯向く。

桃中軒　お前何かわしに、云ひたいことがあるんだらう。遠慮なく云つて御覽。何んだ、何んだ。

泉太郎　いゝえ、何んでもないんです。

桃中軒　ちよつ！　それが可けないんだよ。男なら男らしく、少しハツキリしたら何うだ。直ぐ涙含む――大嫌ひだ。

泉太郎　お母さんのことです。

桃中軒　（屹として）何？

泉太郎、その氣色を恐れて頂垂れる。雲右衛門、不安さうに凝つと悴を見てゐる時、女雲右衛門と名乘る門弟お力、入り來る。男裝して男髷、袴を着く。

お力　先生、行つて參りました。

桃中軒　（泉太郎を見詰めつゝ、不快さうに立上りつゝ）何んと云つてゐた。歸つては來まい。

お力　いゝえ、一緒にお歸りになりました。今ちよつと明船町さんへ廻つて、間もなくお歸りなさいます。（泉太郎を見て）坊ツちやん、何うなすつたの。叱られたんですか。

泉太郎、ぷいと立つて走り去る。

お力　（見上げて）先生、何うなすつたの、然う小言ばかり仰しやつては、坊ちやんがお可哀さうぢやありませんか。

桃中軒　いぢ〳〵して、氣力のないやつは……嫌ひだ。

雲右衛門、吐き出すやうに云つて、口を噤む。

お力　先生、けれども何うか奥樣には……穩かにお話なすつて下さいよ。（心配さうに見上げる）

桃中軒　何か云つてゐたか。

お力　いゝえ、別に……。

桃中軒　お前も千鳥のことを云ふんぢやないか。千鳥のことでお妻が怒つて、家に歸つて來な

いと思つてゐるのだらう。（微笑、弟子の顔を窺き込むやうにして）然うだらう、然うだらう。

はゝはゝゝ。分つてゐるよ。

お力（袴の襞をいぢくりつゝ、獨語のやうに）だつて先生のは……餘りですもの……。

桃中軒　はゝはゝゝ、然うかなあ。おりや又、その位のことは許されてゐると思つたのだが、然う云ふもんぢやないかねえ。

お力　そりや女ですもの……誰だつて……。

桃中軒　然うかなあ、そんな狹い料簡のものかなあ、はゝはゝゝ。

お力　今日の新聞など見ると、誰だつて腹が立ちます。

桃中軒　はゝはゝゝ。

お力　ですから奥様は、この間の赤十字社の講演の時、わざと二度までも三味線の調子をはづして、大勢のなかで先生を躓（けつまづ）かせたと云ふぢやありませんか。

桃中軒（愕然として、別人の如く鋭く）お前それ、誰から聞いた。誰に、誰に聞いた。

お力　奥様に伺ひましたわ。

桃中軒　お妻がそれ云つたか。お前に云つたのか。

お力　えゝ。

桃中軒（唇を嚙んで）然うか、云つたか……。（と聲を落し）實は、おれはあの日、滿座のなかであいつに煮湯を飲ませられたのだ。生れて二度とない……恥をかゝせられたのだ。あいつに一調子はづされたゝめに、殘念ながらおれは……手も足も出なかつた　お力、お前が正直に聞いて、おれの藝は何處か狂つてゐるところはないか。

お力　藝ぢやないと思ひますわ、奥様の腹が立つてゐらつしやるのは、藝なんかではありませんん。

桃中軒　まあ好い、考へて見よう。

雲右衛門、庭下駄を足にかけて普請場の方へ行く。お力その後を見送りてから、嘆息して勝手の方へ去る。

磯野一石、衣服を改めて代議士今井章三、地方有志者谷村某、石井某を案内し來る。書生塚本、右田も付添ひ來り廊下口に坐る。

磯野　暫時お待ち下さい。たゞ今主人に申傳へます。（と去る）

今井　（時計を見つゝ）手間はとらせないよ、吾輩も今日は本部に會議があるんだ。ほんの一寸（ちょつと）でいゝのだ。（書生塚本に）君、今日のその御前講演とか云ふのは何時だい。

塚本　午後の二時とか申しました。

今井　ほう、これも急がしいな。（同行者に向って）何しろこの頃の桃中軒の威勢は素晴しいもんですよ。彼の講演に刺激されて、天下に武士道熱が勃然として喚起されましたからね。

谷村　地方などでも、大した評判です。流石の大熊伯も、彼の人の藝術には感嘆したと云ふぢやありませんか。

今井　熱ですねえ、氣魄ですねえ。政治家としても一流人物ですよ。

石井　お蔭様で、われ〳〵の會も絶好の後援者を得ました

今井　いや何アに、彼とは至極懇意にしてゐるもんだからね。はゝはゝ。

磯野に導かれて、雲右衞門、悠然として入り來る。

桃中軒　いよう、珍らしいなあ、何うしたんだい。

今井　相變らず、走り奴よ。この頃は何處へも御無沙汰だ。

桃中軒　その代り甘（うま）いことがあるんだらう。餘り儲けるな。

今井　はゝはゝ、當節の陣笠にや、そんな好い事をさせやしないよ。

桃中軒　何しろ幹部の連中が突ッ張ってるからなあ。はゝはゝ。

今井　時に早速だが、過日書面で申込んで置いたが……、こちらは茨木縣の有力者で、谷村萬造君、石井香次郎君だ。御紹介して置かう。

桃中軒　わたくし雲右衞門です。何うか……。

谷村　この度は又今井代議士の御盡力をもつて、突然飛んだ御迷惑な御依頼を致しまして……。

桃中軒　はあ、はあ。

石井　何しろ吾々微力者の集りで、會の基本金なども潤澤ではございませんところから……。

桃中軒　はあ、は。慥か、育英資金を集められるのですな。

谷村　然やうでございます。

桃中軒　趣意は至極贊成です。（磯野に向って）何んとか都合がつかんかな、三日間の寄附興行

を望まれるのだ。

磯野　然うでありますな。こゝ當分半年ほどは……何れも先約がありましてな……。

桃中軒　寄附だよ。何んとか都合をつけて上げてくれ。

磯野　然やうでございますね、好しうございます、何んとか一つ……計ふことに致しませう。

雲右衛門の妻お妻、突然瓦燈口襖をあけて嶺を出す。足元よろめき、少しく醉ふ。

お妻　おや、お客様だつたの。お迎へですから參りました。

桃中軒　今日二時から……紅葉館に御前講演があるのだ。

雪右衛門、お妻の顏を見られぬやうにして云ふ。

お妻　あたしが引くんでしたつけかねえ。

桃中軒　（顏を顰めて、呟く）少し、醉つてる。

お妻　相濟みませんでした。ツイお藥にも飽々するもんですから、時たまは冷たいやつで虫を抑へますの。皆様、御免下さい。少し醉つて居りますよ。（と室内に入り來る）あら、今井さんぢやありませんか。何うなすつたの、この頃は些つともですねえ。

今井　（當惑さうに）貧乏暇なしと云ふやつでねえ。はゝはゝ。

お妻　お金が出來て、乙に氣位が高くなるよりは、その方がよゞざんすよ。人間萬事……貧乏のうちさ。

磯野　奥様、お風呂が出來てゐますが、如何です。

お妻　有難う。糠袋をつかつても、この口の悪いのはなほりますまいよ。

磯野　はゝはゝ。

今井、地方有志二人と何か囁き合ふ。

今井　それぢや、君。いづれ磯野君と相談することにして、今日は僕も急ぐから、これで失敬しよう。

桃中軒　然うか……それぢや又會はふか。

今井　奥様、失敬しました。

今井等二人、歸り去る。人々、それを送り出す。

雲右衛門、一點を凝視して長き沈默。

頰白の鳴音。襖の蔭にチラと泉太郎の姿を見る。

桃中軒（沈みたる聲）お妻、お前はおれの三味線が引かれねえのか。

お妻　あたしも體がこんなですからね。誠に……億劫になりましたよ。

桃中軒　然うかなあ……。自分ぢやそれ程とも氣がつかないでゐた……。（腕組して呻くやうに呟きゐる）

お妻　氣がついて駈け出すのは、大抵豆腐屋の通り過ぎた後なのさ。

桃中軒（腕組を深く搾つて、一點を睨む）然うかなあ……。（氣を換えて、輕く）大體に、何う可けない。

お妻　引いてゐて泣けません。

桃中軒（坐り直して）ちよいと、三味線を持つてお出。

お妻　あたしは厭だ。誰か外の者がゐるでせうよ。

桃中軒（かつとして）お妻！

お妻（冷然）何んです。

雲右衛門、お妻を引据ゑんとせしが、その視線を見るうちにこゝろ痺むやうに、ほつと大息を洩らす。

お妻　お前さん、この頃あたしの三味線を何う聞いてゐるえ、あたしや自分ながらもう……あたしの三味線も峠を過ぎたと思つてゐる。（ホロリとして）何う氣張つても、體の病ひには勝たれやしない……。

桃中軒（ハッとしたやうに、妻を見る）何？

お妻　その女房に小言一つ云へず、結構がつて唄つてゐるお前さんは、それでも天下の雲右衛門か、桃中軒の總元締なのか。昔を思ふと、ほんとに、涙が……零れらあ（と泣くやうに笑ふ）

桃中軒　夫婦のなかでも藝は敵だ。勝手なこと云ふな。

お妻　お前さんは昔、わたしの三味線の出來の悪るい日には、打つたり蹴つたりした人だよ。あたしは素よりお前さんに、女として可愛がられて來たのではない。お前さんは自分の藝のために、人も師匠も忘れて、肥しに、わたしの三味線を食つたのだ。お前さんは自分の藝のためには、人も師匠も忘れて、總ゆるものを犠牲にして悔まない、強いこゝろの人だつたのだよ、二人で頃にハンカチを卷いて、九州三界を彷徨ひ歩いた昔をお忘れか。形は二人、夫婦でも、藝の上ではいつも敵、

相互に負けまい凌がれまいと、互に張り合つて來た眞劍さは何うなつたのだい。

桃中軒　（暗然として）それはおれも……思ふよ。二人とも流浪のなかに、昔のことを思出すのが苦しく……たゞ今に見ろ、今に見ろと、東京を睨めて、人知れず齒を喰ひしばつたあの頃が、どんなに張合ひがあつたか知れやしない。その東京にも、思ふがまゝに歸つた今ぢや……却つて心が挫けたやうだ。それだけはおいらも……寂しいよ。

お妻　人氣が盛つて落ちる藝なら、お前さんもまあそれまでの人だらう。傍からかれこれ云ふだけ無駄かねえ。

桃中軒　然うぢやねえ。人氣に醉つて自分の藝が落ちるよりは、衰へ始めたおれの藝に……却つて反對の人氣が立つて來る、そこに世間の恐しさがあるよ。おらあそれを思ふと……いつも背中が寒くなる。

お妻　お前さん、幾つだい。へん、それを云つて濟む年かい。（目に一杯の涙を溜めて、雲右衛門を見詰め）あたしやね、あたしやね。いつまでも生きてゐられる體ぢやないよ。

桃中軒　（狼狽して）これ、何を云ふ。

お妻　えゝ知つてるとも――！（唇を嚙んで流れ出る涙を怺えつゝ）院長先生は隱してゐても、あたしは自分の體だ、知つてゐるさあ――、（と外方を向いて、唇を嚙み）そのあたしが、今のお前さんの意氣地のない體たらくを見て……行くところに行けるかよ。お前さんは、女でも、女房でも、藝のためにはみな食つて來た人ぢやないか。何だい、それに今頃……女房の三味に躓づいて、總身に汗を流すやうな男になつたのかい。これだけ云や澤山だらう、御免よ。

桃中軒　待て、お妻。何處へ行くんだ。

お妻　當分向島に病氣保養さ。

桃中軒　おれの三味線が引けねえと云やがつたな。

お妻　（振り返つて）涙がこぼれません。泣けるやうにさへ歌つて下さりや、何日でも引きますよ。

桃中軒　うむ……。

お妻　では、取止めたお話をもつて、お迎への來るまでは歸りませんよ。

桃中軒　畜生……。

お妻、去る。雲右衛門、蹉跎(あしだ)りして追掛け、引戻さんとする。泉太郎、走り入りて父の前に坐る。睨む。

桃中軒　（凝つと悴の眸を見詰めて）何んだ……？　何んだ……？　何んだ……？（と後に退る）

泉太郎　お父様、どうか千鳥だけはやめて下さい。

桃中軒　（子の屹然たる聲に驚きつゝ）何……。

泉太郎　お母様の病氣に觸ります。千鳥をこの家へ入れることだけは、斷然舍して頂かなければなりません。

桃中軒　お前などの知つたことぢやない。餘計な口を出すな。

泉太郎　千鳥は今、茶の間に來てゐるのです。直ぐ追ひ歸して下さい。直ぐ、直ぐ追ひ歸して下さい。

雲右衛門答へず、廊下口に行く。

桃中軒　千鳥、千鳥。

泉太郎　（後から縋るやうにして）お父様……！

桃中軒　何をする、馬鹿者。おれは靜岡の浮月で、お前に何んと云つた。おれの體は傷だらけだ。決して完全を求めるなと云つたではないか。

泉太郎　舊い傷は爲方ありません。新しい傷をつくるお父様を見るに忍びないんです。

桃中軒　何、何……何！（足踏みして）おれは藝のために千鳥を欲するのだ。千鳥からあの若さと無邪氣さをとるのだ。藝のための肥しにするのだ。

深川の藝者（半玉）千鳥入り來る。

千鳥　先生、何うなすつたのよ、大きな聲をして。

桃中軒　入れ、こゝへ來い。

千鳥　何なの、何うしたの。

千鳥、恐々なかへ入り來る。泉太郎、猛然として飛び上り千鳥を突倒す。

泉太郎　貴樣入つちや不可ない。歸れ。

千鳥　あれ先生――（雲右衛門に縋り付く）

泉太郎　歸れ〳〵、歸れ、歸らないか、畜生……。

泉太郎、狂氣の如く泣いて躍りかゝる。千鳥、怯えて立つ。雲右衛門、突如として泉太郎を引倒す。

桃中軒　泉太郎、貴様はおれの藝に邪魔をするのか。

泉太郎　千鳥を歸して、千鳥を……千鳥を歸して下さい。

桃中軒　こいつめ――――

泉太郎　打たれても好い、お父様のためだ、千鳥を歸して下さい。

雲右衛門、泉太郎を打つ時、磯野走り來る。

磯野　これ先生、何をなさる、何を……これ先生。

桃中軒　離してくれ、離してくれ。おれの藝を墮落させるやつは、こいつだ、こいつだ。泉太郎だ。

磯野　馬鹿なことを、大抵にするもんだ。（常に似ず赫として）放せ、放さないか。泉太郎さんを打つなら磯野が相手だ。

桃中軒　何、何、何？（と泉太郎を確と膝下に組敷きつゝ）貴様が相手だ？　誰が相手でもいゝ。おれは自分の藝を守るのだ。

磯野　（雲右衛門の腕をつかんで）何――！

桃中軒　おれは只一人の浪花節語りであればいゝのだ。おれはたゞおれの藝をたのんで生きればいゝのだ。道徳者にも、德行者にもなりたくない。たゞ完成なる一人の祭文語りであればいゝのだ。

磯野　何――

桃中軒　それなのに、それなのに……（涙聲になりて）世間はおれの成功と共に、おれを完全なる道德者、完全なる人間と見ようとする。完全なる人間に作り上げようとする。おれは、人間であるよりも藝人でありたい。おれは裸な人間だ、傷だらけな人間だ。その血みどろの間から、この、この藝をつくり上げて來たのだ。（と泣く）それなのに、それなのにこいつは、泉太郎は、おれを完全な人間に作り上げようとして、次第におれを藝から遠ざけようとするのだ……。（と泉太郎を離して啜り上げて泣く）

磯野　（泉太郎を引離して介抱しつゝ）好いよ、好ござんす、分つた。泉太郎さんはおれが引受ける。寄宿舍へ入れて勉強させるから好い。分つた、分つた。

雲右衛門、兩手にてわが肩を抱きしめ、わが身をふり捨てるやうに打振りて。

桃中軒　あゝあ、おらア何も要らねえ、たゞ藝人でありてえ、たゞ藝人でありせえすりやいゝのだ。

ベタ〳〵と頽れるやうに坐つて泣く。

（幕）

第四幕

時――明治四十三年、春の淡雪ふる日。

處――芝公園、桃中軒雲右衛門の居宅。

芝公園内に新築せる雲右衛門の家。茶の間、中の間、二間ほど舞臺に見はる。茶の間には火鉢、茶棚、縁起棚等の調度備はり、中の間には簞笥、神棚、衣桁等あり。衣桁にはなまめかしき長襦袢を掛けたり。大入袋、宣傳ビラ、羽子板、人形など飾り立て、室内の裝飾は總て主婦お貞（藝者千鳥の本名）の趣味にまかせ、藝者屋または待合らしく見ゆ。

幕明く。主婦お貞、湯上りの姿にて中の間の鏡臺に向ふ。小間使お米、それを手傳ふ。茶の間には女弟子お力、紺飛白の筒袖姿にて來りゐる。

今日は大掃除の日とて、近所には疊を叩く竹の音など聞え、書生右田、塚本、弟子桃雲など立ち働きて、掃除を終りし道具類を片付けゐる。（注意。お力お貞はかねて相反目する間にて、その心持は語氣のうちにも顯はる。弟子書生などにもそれ〳〵の味方ありて、家庭のさま何んとなく和熟せず。お力には上方訛りあれど言語ハキ〳〵して闊達に、お貞はやゝ陰柔にして、小兒らしき言葉のうちにやゝ故（わざ）とらしさあり。）

注意。作者上方言葉に馴れず。お力の言葉を同じやうに書き置きたれど、前場、この場を通じて適宜に大阪訛りを加ふるがよろし。

お貞　生憎こゝろづきませんでした。御免なさい――ねえ、それで好いでせう、お力さん。

お力　誰もあやまつて下さいと云やしません、たゞね。それぢや濟むまいと思ふのよ。

お貞　ですから行屆きませんでしたと云つてゐるわ。

お力　奥様はね、好き好んで御病氣をなすつてるのぢやありません。

お貞　困るわねえ……。あたしほんとに氣がつかなかつたんですもの。

お力　然うでなくつてさへ、病氣で氣がたつてゐらつしやるのに、自然先生を恨むやうになるぢやありませんか。

お貞　ですから先刻（さつき）あたし伴傳で見立てゝ、瀧右衛門にわざ〳〵病院までお届けしたんですよ。

お米（油櫛など拭きつゝ）何うしても上方の方は、お話が細かく折入つてゐらつしやいますからねえ。

お貞　ほんとにあたし間に立つて困るわ。幾度さう云つても、先生はたゞうむ〳〵と云つて、些つとも指圖をして下さらないんだもの。

お力　桃中軒の奥様とも云はれる人が、咯血して襟のよごれた蒲團を、二日も着てゐるなんてことがあるものか。

お貞　それはもう何遍責められても同じ事……みな私が氣がきかないのよ。私が悪いの。

お力　あなたは昨今だから知るまいが、奥様はこの家にも先生にも、粗末にしては罰のあたる方なんですよ。

桃雲　（道具を片付けつゝ口を出す）　力ちやん、お前さんも諄いよ。こちらはもうそのため今日伴傳で、二百幾十圓といふ素晴らしいのを買つて、お屆けなすつてゐるのだ。

お力　（横を向き）　君なぞの知つたことぢやない。

桃雲　お前さんだつて又、さう一々目鯨を拾つて、大久保彦左衛門を、きめるにも當るめえにさ。

お力　默つて見てばかりも居られないよ。

お米　御新造さん、いつそ手をお突きなすつたら如何でございます。謝まりやうが御不足なのでございませう。

お貞　手はあいてゐるし、頭なんか幾らでも下げるけれど、それぢや矢張り駄目なんだらうよ。

お米　ほんとに何うすりや好いと云ふんでせうねえ。

お力　お貞さん、お前さんこの頃毎日の東京新聞を見てゐますか。先生は今何んと云つて、世間から攻撃されてゐるの。

お貞　書くのは新聞の役だ。幾らでも書くがいゝ――。

お力　何んですつて。

お貞　わたくしぢやございませんの。（と空嘯き）先生が然う仰しやつてゐると云ふ話なのよ。

お力　恩義ある妻を捨てゝ、瀕死の病人を見殺しにするの、殘忍だの、冷酷だの、無情だのと……いろ〳〵昔のことまでほじくり出して、毎日大きな活字で書かれてゐるのが、お前さんは氣になりませんか。あたしはね、讀むたびに、體が顫へるほど腹が立つんですよ。

お貞　ですから私は、病院へお見舞ひなさるように、始終然う云つてゐるんですけれど……。

お力　坊ちやんのことだつて然うだ。家へも寄せつけないで、寄宿舍などにおつぽり出して置くから、いろ〳〵悪い評判を聞くんぢやありませんか。

お貞　（姿見をはなれて茶の間に來る）お力さん。今日は御覽の通り大掃除で、やつと今あたしもお風呂へ入つたぐらゐなんですよ。大抵に家のなかを揉まして下さいよ。

お力　あたしは今日、先生にも云ふつもりでは、決心して來たんです。あたしだつてこの家で、多少の事は云へる身なんですよ。

お貞　（冷笑的に）　へえ……。それは存じて居ります。

お力　（膝を向けて）一體奥様を、何うするつもりなの。
お貞　あたしに云つても無理よ。先生次第なんだもの。
お力　先生次第？　お前さんほんとに然う思つてゐる？
お貞　お妻の顔を見るのが、苦しい。病院の門までは行つても、つい氣がおくれて、馬車を戻して歸つて來るやうな時もあると、先生は然う云つてゐらつしやるわ。
お力　そりや自分の不人情に……氣が咎めるからさ。
桃雲　（煙草に火をつけつゝ）お力さん。そりや私などの出る幕ぢやねえが、お前さんも些と依怙地だよ。先生は何か腹にあつてなさることだ、何う思つたつて御新造さんの自由になるものか。先生の氣性を知つてゐなさるぢやないか。
お力　君に云ひはしないよ。あたしはね、先生の氣性を、ようく知つてるつもりだから云ふんだ。先生はあゝ見えても、對者（あいて）にはそりや弱くつて、こちらの仕向けやう一つで、何うにもなる人なんだよ。
お貞　それぢや何、お力さん。あたしが間に邪魔に立つて、先生と奥様との間を塞（せ）いでゞもゐ

ると云ふの。
お力　云ひたいところだが、あたしは未だ然うまでは云はない。たゞ、世間がねえ、何う見るかと云ふ話なの。
桃雲　はゝはゝゝ。それを云ふから可けないよ。はゝはゝゝ。
お力　何が可笑しいのさ。
桃雲　可笑しくもなりますよ。それぢやまるで人いぢり、鬼千疋の小姑氣質と云ふもんだ　はゝはゝゝ。
お力　可笑しけりや笑ふがいゝ。（わが嫉妬にこゝろづき、少し萎れて）わたしはたゞね、奥様のことにしても坊ちやんのことにしても、默つて見てはゐられないのだよ。グルリと廻つて皆、先生の人氣にかゝるんだよ。
桃雲　その代りには、この頃急に冴え返つた先生の舞臺を見なさるがいゝ、世間は不道徳の何んのと攻擊しながらも、雲右衛門の藝が蘇生したのと驚いてゐるぢやないか、人は九州時代と云ふけれど、あつしなんか聞いては、とても較べ物にもならねえ。この頃の先

生には何か憑物がしてゐるんぢやないかとさへ思ふ位なんだ。

お力　それとこれとは……話が別さ。（苦しさうに云ふ）

桃雲　處が別ぢやねえんだ。先生御自身でも云つてゐなさるし、又、松月さんなども然う見てゐる。先生には不思議な力があつて、世間に非難や攻撃される時には、いつも藝が冴え返つて、恐ろしいほど光りが出る。今度だつて矢ッ張り、御新造さんのことや奥様のことで、世間が先生を葬らうとすればする程、先生にはそれと戰ふ勇氣が出て、藝に後光がさして來ると、松月さんも舌を卷いてゐなすつた。

お力　藝はそれでも……それだけぢや人間が濟むまい。兎に角、あたしは今日先生に會つて、思ふだけのことは云はして貰ひます。坊ちやんの事などでも、厭な噂ばかり聞くので、あたしはそれも心配して居ます。

桃雲　大體この頃の坊ちやんの仕方が好くありませんよ。時たま寄宿から歸つて來ても、御新造さんなど睨め廻してお小遣など持出す樣子は、まるで不良少年だ。

お力　鼻綱の取りやうが悪いと、小牛でも暴れると云ふからねえ。

お貞　桃雲。もうお前何も云はないがいゝよ、あたしと云ふ餘計者が入つてゐるから、それで家が揉めるんでせう。

犬の啼音聞ゆる。姿見など片付けゐたるお米、耳を立てる。

お米　おや御散歩からお歸りのやうでございますよ。

お貞、空嘯きて立たず。お力も立たず。

桃中軒雲右衛門、角袖外套のごときものを着て外より歸り來る。奥の間に入らんとして、廊下口より顔を出す。

桃中軒　おゝ、お力か。久しく見えなかつたな。（犬の鎖をそこに投げる）

お力　つい、病院の方へ通つて居りますから。

桃中軒　外は寒いよ。雪にでもなりさうだ。（紛らすやうに笑つて、視線は神經質に）　お貞、松月爺さんはまだ歸らないか。

お貞　さあ、氣がつきませんでしたよ。

雲右衛門、その氣色を不快さうに見て、奥に入らんとする。

お力　先生、わたし少し今日、お話があつて參りましたの。
桃中軒　病院のことではないか。それなれば今日は謝まる。少し胸に持つてることがあるんだ。
お力　けれども今日にも萬一のことがあつたら、後悔なさいますよ。
桃中軒（思はず足を踏み入れて）　そんなに悪るいのか。
お力　昨夜院長先生からも、直接電話がかかつてゐませう、今朝から弟子どもや皆、心ある者は集つて、お出なさるのを待つて居りました。
桃中軒（暗然として）　知つてるよ。知らないで……ゐるのぢやない。
お力　先生！
桃中軒　待つてくれ。今日は然う……棘々（とげ〳〵）しく云つてくれるな。少し……こゝろの痛むことがあるのだ。
お貞　先生。けれども何故病院へゐらしつて下さらないんです。みな私のせゐのやうに取られてゐるんです。
桃中軒　お妻はおれを……怨んでゐるだらうなあ。尋ねて行つたのは……二十日も前だ。おらあ

その時も……あいつの顔が見られなかつた。（俯向くやうにして呟く）
お力　先生！
桃中軒（同じ調子ながら被せて）　おらあ幽靈を見たんだよ。
一同、驚いて雲右衛門を見詰める。
桃中軒　おらあお妻の顔に、その時あり〳〵と幽靈を見たんだ。それは女だ、お妻も死ぬ時は、やはり只の女であつたといふ……悲しい幽靈の姿なのだ。おりやお妻に限つて、そんな幽靈を見せられようとは思はなかつた。
お力　先生。それは何んですか。奥様が少しこの頃氣が立つて、些時（ちよいと）でも先生を傍に引付けて置かうとして、怨んだり僻んだりなさるのを、女の幽靈と仰しやるんですか。
桃中軒　おれはお妻だけは、根本骨（こんぽんほね）の髓まで藝の人だと思つてゐた。それが今死際になつて……やはり只の女であつたと、思ふことが寂しいのだ。（と項垂れしが、又何か云はんとするお力に被せて）先づ思つても見ろ。お妻はおれに心を殘しながら……一人寂しく死んで行くのだ。一分も一秒もはなれたくないおれの手から離れて……厭でも死んで行かなけりやならない體

なのだ。おらあ、それを思ふと……耐らねえ寂しさに襲はれるんだ。氣違えのやうになつてかけて寄來す、電話の受話器を外させて置いたりするのも、何うぞしておれはお妻だけは……只の女とだけは思ひたくねえ。藝に生きた人として、長くおれのこゝろに生かして置きてえためなのだ。お力、おれは不人情者と云はれてもいゝ、然うまでおれを寂しがらせないでくれ。（心の痛みを振り拂ふやうに、頭を打振り）酒だ、酒だ、酒を持つて來てくれ、誰も來るなよ。

雲右衛門、奥に入る。お力、俯向いて沈思。桃雲、お米など酒の用意をなす。奥に運ぶ。門弟瀧右衛門、病院より歸り來る。お力の座にあるを見て、下口よりお貞を呼ぶ。

瀧右　御新造様〳〵、些いと、些いとお顏を貸して下さい。

お貞　ぢや瀧右衛門、病院から歸つて來たのかい。

瀧右　御新造様、大しくじり〳〵、奥様は半狂亂の體ですよ。

お貞　えゝ、何――。（思はずギョッとして立上る）

お力、同じく顏を上げて見る。お貞、それを見て又火鉢の前に坐る。

お貞　何んだか知らないけれど、入つて云つたらいゝぢやないの。

瀧右　ですけれど、人の前ぢや……御新造様、些つと。

お貞　厭だよ。痛くない腹を探られるのは厭だ。かまはずそこで云つて御覽よ。

瀧右　ほんとに好いんですかい。構ひませんか。（と室内に入り來る）

お貞　當り前ぢやないか、何が、何うしたと云ふんだよ。

瀧右　奥様はね、あの蒲團を御覽になると、急に狂ひ出して、雲右衛門に會ふんだ擔架を持つて來いと暴れ出して、院長や醫局の方が、どう止めても聞きやしません。病院中大騷ぎですよ。

お貞　何うしてあの蒲團がお氣に入らなかつたの。

瀧右　それがね、實に悪いことがあつたんですよ。あたしも全く、そこまでは氣がつきませんでした。

お貞　（流石に顏色を變えて）何うして、何が可けなかつたの。

瀧右　染模様なんでございますよ。

お貞　流れに御所車……山櫻の模様ぢやないの。

瀧右　あの櫻に短冊が下つて居りましたらう。その短冊の歌をお讀みになつたものだから、さあ耐りません。雲右衛門に咀はれた、禱り殺されるなんて、寢臺の鐵棒につかまつて、起き上らうとなさるんですよ。誰が何を云つても　耳にも入りやしません。

お貞　そんな惡い文句の歌なの。

瀧右　（頭を掻いて）　何うもねえ、それが……困つたことでございますよ。院長さんの話には、こりや誰が宥めても聞きさうがないから、直々御主人にねらしつて頂きたいと、言付けて飛んで歸つて來ましたよ。何んしろこの樣子では、病氣にも觸はる、お生命にもかゝはるからと云ふんですよ。

この時女中お米、二本の獨利を奥に持ち行かんとする處なり。お力、奪ふやうにその獨利を取りて、屹と唇を嚙んで、自身それを持ち行かんとす。

お貞　（聲を潜めて）それでその歌は、何んと云ふ歌なの。

瀧右　それ忠臣藏で、鹽冶判官が師直に顏世御前の歌をとゞける處がございませう　あの歌なんでございますよ。

お貞　えゝ。

瀧右　さなきだに重きが上の小夜ごろも、わがつまならぬつまなかさねそ――あれなんですよ。後で聞くと、友禪染の蒲團にはよく染めてある歌なんださうでございますよ。

お力、獨利を持ちて廊下口まで行きし時、その歌を聞いてハッとして立ち竦む。獨利を下に置いて、そこに坐る。

お貞　何うしてその歌が可けないの。模樣になつてるのを買つたのだもの、何もあたしの所爲ぢやないぢやないの。

瀧右　へえ、そりやまあ……然うですが。奥樣にしては何か……當付けられたやうにお思ひなすつたのでせう……。

お貞　だつてそんな馬鹿な……（と何か考へて）　好いわ。

お貞、お力の疊に置きし獨利を持ちて奥へ行かんとする。お力、慌てゝお貞を止め、頭を振る。

お貞　何うしたの、何うして可けないんです。人がわざ〳〵親切に買つて屆けてあげたのに、

何んぼ病人だつて咀ふの禱るのと、そんな難題を云はれて、默つてはゐられやしない。何故止めるのよ。何故先生に云つては可けないのよ。お力さん、泣いてちや分からないぢやないの。何うしたの、何うしたのよ。

お力　（萎れて）どうかその事だけは、先生に云はないで下さい。

お貞　可笑しいのね、何故云つちや可けないの。

お力　あの上先生を……苦しめたくはありません。あたしこれから病院へ行つて、どんなにでも奥様を宥めますから、今のことだけは決して先生の耳に入れないで置いて下さい。

お貞　けれども、何んぼ何んだつて、餘りだと思ふわ。

お力　奥様もこゝへ來てその歌を讀むのも、みな時の廻り合はせでせう。では、行つて參ります。

お力、萎れて出て行かんとして廊下口まで行き、そこに立つ雲右衞門の姿を見たるこゝろにて立ち竦む。

桃中軒　（沈みたる聲のみ聞ゆ）　お力……賴むぞ。

お力　……（面を伏して立つ）

桃中軒　その舊い疵痕はお妻ひとりが苦しむのではない。おれも始終苦しんでゐると……然う云つてくれ。

お力　は……。

桃中軒　誰の疵でもない、二人の疵だ。おれも一生その傷口を抱き締めてゐる。お妻にもその傷口をシツカリと抱いて……靜かに眠るやうにと……お前から然う云つてくれよ。（去る）

お貞　あ、貴方……（雲右衞門の後を追うて去る）

お力、泣く。やがて悄然と出て行かんとする時、三味線引松月、ウロ〳〵して外より歸り來る。

松月　おゝ、お力さんか。（と悅んで手を取り）　好い時に、ゐてくれた。丁度好かつた。話がある、一寸。（と中の間の方に引張る）

お力　お爺さん。あたしは今、病院に急ぎの用事があります。

松月　いや〳〵、大事な話だ。泉太郎さんの學校のことだ。泉太郎さんがな、學校で、友達と喧嘩をしたのだ。

お力　お爺さん。それどころぢやないんですよ。

（お力、松月を突き放すやうにして、泣きながら走り去る。）

松月　何んだ〳〵、家にも騒動が持上つてるのか。

瀧右　嫉妬の角突き合ひで、内も外も混戰ですよ。

桃雲　お爺さん。さツきから御大が、何うした〳〵と待ちかねてゐますよ。早く行つて御覽なさい。

松月　うん、然うか。（と行きかけて立止り、手眞似にて盃）遣つてるか。

桃雲　え、先刻から始めてゐます。

松月　そいつは可けねえ〳〵。困るな、困るな。（とウロ〳〵して）大將が聞いたら、風呂に行つてゐませんと云つてくんな。いや、それよりは例の如く食ひ醉つて、正體がありませんと云つておくれ。蒲團部屋に隱れてゐるから、決して然う云つちや可けないよ。

桃雲　だつて大層用ありさうに、先刻から聞いてゐますよ。

松月　その用がお前、困るんだよう。泉太郎さんが寄宿舍で友達どもと大喧嘩を始めて、今退

校にもなるところなんだ。（兩人驚きて、思はず聲立てる。）

松月　（兩手で抑へて）内所〳〵、靜かにしてくれ、靜かにしてくれ。おらあ氣の毒で、あの人に話が出來ねえ。聞いてゐるうちにあの人が、凝いつとこゝに、眉毛の間に暗らい皺の寄るのを見ると、おれまでこゝが、胸が痛くなる。困つた、困つた。

瀧右　だがお爺さん、あの内氣な坊ちやんが、何んだつて又大勢を相手に喧嘩などしたんでせう。

桃雲　あんまり内氣さうにもねえぜ。この頃の不良少年ぶりと云つたら、何うでそんな事にならさうだつたよ。

瀧右　お前は直ぐ御新造さんにおべつかつかつて然う云ふが、人と喧嘩などしさうな坊ちやんぢやねえ。

松月　（顔を上げて）それが又物だよ。短刀を拔いて學校の運動場で、十幾人を相手に大立廻りをやつたんだ。

瀧右　えゝ。

松月　内所〳〵、靜かに〳〵。（と頂垂れて頸を振りつゝ）　あゝあ、分からねえもんだ〳〵。人のこゝろに何が潜んでゐるものか、自分にも他人にも分かるもんぢやねえ。あの涙もろい内氣な兒のこゝろに、そんな荒々しい血が潜んでゐるとは、誰にしても思ふめえ。これが人間の恐しいところだ、又、奥深かいところなんだ。あゝあ、恐しいこつた、恐しいこつた。

松月、嘆息しながら小座敷の方へ去る。

桃雲　何んしろ何から何まで困つたことだ。どれ、おい等は一ツ風呂ほこりを落して來よう、お前はどうだ。

瀧右　まあお前、先に這入んな。後から行くよ。

桃雲　然うか。（去る）

桃中軒支配人磯野一石、案内なく入り來る。

瀧右　おや、これはお出なさい。誰かお連さんですか。

磯野　まゝゝ、好い。（と手にて制し）何うだい、まだ病院へ行つてやる氣には、ならないらしいかい。

瀧右　何んですかもう、滅茶〳〵なんですよ。

磯野　病院は長いことはないぜ。

瀧右　へえ、あつしも今日行つて見て、びつくりしました。それにお前さん今日――。

磯野　聞いたよ。悪い時に悪いものが目についたものだな。

瀧右　呼びませうか、それとも奥へゐらつしやりますか。

磯野　實は今日、例の松右衛門のことで來たのだが、今日は話をせずに歸らうよ。氣色の悪いところに言出して、却つて松右衛門のためにも損だらう。

瀧右　然うですな、今日はお舍しになつた方が好御座んすよ。何しろ奥様のことや坊ちやんのことで、可也いら〳〵してお出になります。

磯野　瀧右衛門、實は昨夜その坊ちやんのことを、倉田君からチラと聞いたのだが、飛んだ事になつたものだな。

瀧右　へえ、私も今松月爺さんに聞いて、びつくりして居ります。

磯野　松月爺さん？

瀧右　何處か先生のお使にでも行つたのぢやございますまいか。今のさきに歸つて來て、その話でございました。

磯野　それ程の大事なら、何故僕に相談がないのかなあ。

瀧右　貴方にまるでお話がございませんか。

磯野　一向に聞いてゐないんだよ。

瀧右　へえゝ、可笑しうございますな。何う云ふお心でせう。

磯野　先生、何か思惑があるんだらう。こつちからは默つてゐるがいゝよ。

瀧右　然うですねえ、樣子を見て居りませう。

雲右衛門、つゞいてお貞出て來る。

桃中軒　分つたよ、分つた。お前は知らぬ顏をしてゐりやいゝのだ。

お貞　ですけれど私……。

桃中軒　まあ好い、好い。（磯野を出て）いよう、何時來たんだ。

磯野　へえ、只今……。

桃中軒　瀧　爺さんはまだ歸らねえか。

瀧右　へえ……。

桃中軒　何うしたんだな。何をしてるんだ。（と呟き磯野に）二三日些つとも顏を見せないぢやないか。いろ〳〵用も溜つてゐるんだよ。

磯野　巡業の下拵や何かで、少しゴタ〳〵してゐましてな。

桃中軒　始終病院へ行つてくれてゐるのは知つてゐるよ。有難う。

磯野　いゝえ、何アに……はゝはゝ。

桃中軒　磯野、お妻も今度は……駄目らしいなあ。

磯野　何うも……困りました。

桃中軒　君は今、松のやつの詫びに來たのぢやないか。

磯野　いゝえ、詫びと云ふぢやありませんが、やつも今度はひどく困つてゐるやうでありますから……。

桃中軒　聞かねえよ。おらああいつの面を見るのも厭だ。

磯野　はゝはゝゝ。ひどく嫌つたもんですね。

桃中軒　おひやらかしては可けねえ　おらあ熟々この頃、弟子や子供なんてものに愛措がつきた。おれの弟子に一人だつて、滿足なやつはねえ。

磯野　はゝはゝゝ。

桃中軒　（眉を曇らせて）何が可笑しいんだ。（と睨むやうに見る）

磯野　可笑しくつて笑つたのぢやありません。機勢ですよ。はゝはゝゝ。

桃中軒　全體何んのために、弟子や子を育てるんだ。おらあそいつが分らくなつた。一口に自分の跡を繼がせると云つて、誰でも分りきつたことのやうに思ふが、好く考へて見ねえ。こんな分らねえ話はねえんだよ。自分を繼がせると云つて、何う繼がせるんだい。おれの節廻しを眞似て、おれの假色をつかふ弟子を見るのが、繼がせると云ふのか。おれの善いこと悪いこと……自然に似るのか眞似るのかは知らないけれど、段々と自分に似てゆく子供を見る、それが後を繼がせると云ふものか。磯野、よく考へて見てくれ、この位分らない話はねえぜ。

磯野、さ、然うでありますな……はゝはゝゝ。

桃中軒　考へるとツク〳〵厭だ。みな振りきつて一人になりてえ。

磯野　はゝはゝゝ。

桃中軒　腹が立つ。笑はないでくれ。

磯野　相濟みません。

桃中軒　おらあこの頃、弟子どもがおれの節を眞似て段々おれに近くなるのを見ると腹が立つてならねえ。藝を盗まれる、そんな事を思ふんぢやねえ。おれが自分で癖と思つて、直さう〳〵としてゐる悪い癖までを、弟子どもは結構がつてたゞ眞似てゐる。それを聞くとおらあ……耐らなく厭だ。松のやつなども、瀧右衛門にそつくりだとか、よく癖をとつたとか云はれて、鬼の頭でもとつたやうに悦んでやがる。當分おいらの耳に聲の聞える處ぢや、歌はせねえようにしてくんな。先生はおれの藝が出來て來たので、それをやツかんで機嫌が悪るいなんて、松のやつ、蔭で自惚れてゐるさうだ、馬鹿を云へ、それどころぢやねえ、假色使ひめ！

磯野　（腕組をといて）　然し好い話だ。瀧右衛門、よく聞いて置くがいゝぜ。

瀧右　へえ、

小間使お米、入り來りてお貞に囁く。

お貞　あ、然う、床屋が來たの。それぢや顏をおあたりなさるやうに、用意して置いておくれ。

（とお米を去らしめ）　先生、床屋が參りましたよ。

桃中軒　うん、待たして置いてくれ。（磯野に）おい何うだらう。一つこの家を解散して見ようか。親だの子だの、弟子だの師匠だのと、面倒だ。みな一人々々にはなれて見ようか。

磯野　惡くはありますまいね、出來れば。

桃中軒　眞劍に話してゐるんだよ。

磯野　あたしだつて眞面目に云つてるんですよ。はゝはゝ。

桃中軒　可かん〳〵。（舌打）氣が立つばかりだ。今日は歸つてくれないか。

磯野　あたしもお暇しようと思つてゐるところだ。はゝはゝ。（と立ち掛けて　間）　が、ねえ先生。

桃中軒　何んだ。

磯野　あなたはつく〴〵、この世に苦しむために生れて來たやうな人だねえ。その苦しみが藝ですよ。そこからあなたの藝が生れるんですよ。あたしは見てゐて、時々後姿に手を合はせたくなるよ。

桃中軒　何を云やがる。

磯野　はゝはゝ。一石の臺辭ぢやシンミリと來ねえなあ、はゝはゝ。では皆樣……はゝはゝ。

磯野一石、頭を下げて笑ひながら去る。

雲右衛門、凝つと一點を見詰めて考へる。

お貞　あなた、お顏は……。

桃中軒　うむ、今行く、用意して置いてくれな。

お貞　はい。

お貞、去る。瀧右衛門、去る。電燈點る。

松月老人、そろ〳〵と障子をあけて、俯向いたまゝ入り來りて遠くに坐る。雲右衛門、暫く考へ込んでゐて心付かず。嘆息して立上らんとして初めて悄然たる松月の姿を見る。

桃中軒　（彈かれし如く驚き）　お、爺さん、何うだつた。

松月　……。（頂垂れたるまゝ、力なへ頭を振る）

桃中軒　駄目か、駄目か・駄目か。（松月の頷くを見て、目を寂しく電燈に移しつゝ）然うかあ……。

松月　……。

桃中軒　やつぱり短刀を抜いて暴れたのに相違ないか。

松月、頷く。

桃中軒　當人は何うした。爺さん、一緒に歸つて來たのか。

松月、頭を振る。

桃中軒　何うした、何處へ行つた、何處へ行つたんだ。

松月　學校で校長さんに說諭されて、それから……相手方の書生さん達に一々謝まらされて……その上で、後から歸つて來なさるだらう。

桃中軒　野郎、謝まる氣なのか。

松月　何んとも、校長先生が然う云ふのだから……

桃中軒　爺さん、えゝお前もまた……。（と松月の肩を掴みて顫へつゝ）何故、無理にも連れて歸つて來てくれねえのだ。

松月　だつてお前さん……當人が謝りてえと云ふんだ。

桃中軒　え、畜生！（と顫へつゝ、腰より朱總の十手を取り出し）歸つて見ろ、撲ち殺してくれる。

松月　おい等も校長に、退校するもんなら何も謝つたり……高が若い者の喧嘩のことだ……。

桃中軒　えゝ聞かねえ〳〵〳〵。野郎、歸つて見ろ。撲ち殺す、撲ち殺す、撲ち……撲ち殺してくれる。

雲右衛門、顫へ怒りつゝ奥の方に去る。

瀧右衛門出て來る。

お米　（雲右衛門の居らぬを見て）　お爺さん、先生は。

松月　（顏を上けて）　奥の方へ……行きなすつたやうだ。

お米　何うしたんでせう、床屋が待つてゐるんぢやないの。

瀧右衛門、呟きつゝ奥に入りかゝる時、電話の鈴急にけたゝましく鳴る。

松月　あゝ、これ、瀧さん。呼んぢや可けねえ。

お米　何うして。

松月　可けねえ……可けねえ……。（呟き、頸を振る。）

お米　仕様がないね、手をあけてゐるんですよ。

瀧右衛門、呟きつゝ去る。電話の鈴、また鳴る。

松月、ゆつくり立ちて電話口に向ふ。

松月　（電話などに馴れぬ態にて）　はい、はい〳〵、然やうでございます。はい、然やうで、桃中軒でございます。はあ、はあ、桃中軒で、え、病院……は、は、え、あゝお力さんか、何、何……松月だよ、わしだよ。うん、うん、へえ……うん、うん、へえ……。そんな、そんな事が今日あつたのか。それでお前さん病院に駈付けたのかい。うん、うん、へえ、短冊の歌が？　うん、うん、さなきだに……うん、うん　こりや可けねえ、なる程な。うん、うん……。

松月、ゆつくり〳〵せる調子にて、今日の出來事についてお力の報告を聞く時、奥の方にて何やら物を投げつける音聞ゆ。松月、びつくりして受話器を忘れてその方に耳を澄す。

松月　（電話の鈴に呼ばれて、慌てながら）うん、うん、聞いてゐるよ、聞いてゐる。それで、お前さんが駈付けて、うん、うん、手を握つて、先生のこゝろもちを……うん、うん、（涙聲）手を握つて、先生のこゝろを話すと……うん、うん、誰の疵でもねえ、うん、うん、二人の疵だ、おれも一生その疵口を……抱き締めてゐる。うん、うん、お妻さんにもその傷口をシツカリと抱いて……何、聞えねえよ、（ハラ〳〵泣き）靜かに、靜かに眠るやうに……眠るやうにと然う云つたのか。お前さん、それ病人に云つたのか、云つたのか……うん、うん、病人悦んだ？　それ聞いて悦んだ？　うん、うん、それで迷ひが覺めた、藝の人で死ぬ……何何……うん、それで初めて迷ひが覺めた、お妻はたゞの女と云はれたくねえ……藝の人になつて……靜に死にますと然う云はしやつたか。あゝ、あゝ……切つてくれよう、電話切つてくれ、そつちから切つてくれよう……おらアこの年になつて、それ聞かうとは思はなかつた、

切つてくれ、電話切つてくれ……切つてくれ。（泣く）

この通話の間に、物を投付ける音二度ほど聞え、相罵る聲など斷絶して聞えたる後、倉田楚水と雲石衛門、互に必死と取組み合ひつゝ、奥の間より轉がり出る。

瀧右衛門、桃雲、お貞、お米、その他の書生等つゞき來れども、うろ〳〵するのみにて手の出しやうなし。

倉田　誰も手を出すな、手を出すな……手を出したら承知しねえぞ。（上になり下になり組み合ひつゝ）さあ畜生、今日こそこの野郎殺してやる、畜生、今日こそ、もう赦せねえ、撲殺してやる。

桃中軒　何を畜生！　おれはおれの悴を始末するんだ。離せ、畜生、離せ、離せ……。

倉田　この野郎……。おれの悴とは好く吐かした。うぬはおれの悴のつもりでも、今日は倉田が赦さねえ。赦さねえ……死ぬほどの目に合はしてくれる。

桃中軒　誰も手を出すな。こんな野郎……おれが制裁してやる。雲右衛門だ、手を出すな。

倉田　何をこの浪花節め……デロレン、無教育者！

桃中軒　何、畜生……へツぽこ、新聞記者め！

倉田　何が武士道だ、何が、何が……國士だ。

桃中軒　畜生、みずてん野郎……貧乏文士！

倉田　貧乏でも、おりや、おりや……人間だ、人間だ。

桃中軒　金を借りたの忘れたか。

倉田　何、金なんか……何日でも返さあ。

桃中軒　女にふられやがつて……。

倉田　手前こそ、女に……畜生。女にふられてゐらあ。

兩人、ヘト〳〵になつて取組み合ふ。その疲れたるを見て、松月等無理に引放たしむ。兩人は離れながらも互に目を睨み合つて、衣服の亂れたるを無意識に搔合はせゐる。

倉田　野郎、泉太郎をその十手で、一つでも撲つて見ろ。うぬのその咽頭笛、搔き拐つてくれる。

桃中軒　撲るとも、おれの悴だ。おれの自由だ。學校で喧嘩をしたのが悪いんぢやねえ。双物

を、短刀を持出したが卑怯なんだ。雲右衛門の悴なら、何故血へどを吐くまでも、素手で喧嘩をしねえ。双物など出すのはうぬが弱いからだ。短刀をふり振はなければ禦ぎのつかねえやうな弱虫が、生きてこの世に何が出來る。死んでしまへ、くたばつてしまへ！

倉田　この野郎、まだ分らねえか。誰のために、泉太郎は平常その短刀を懷に忍ばせてゐたと思ふ。

桃中軒　うぬが弱いからだ、弱いからだ。

倉田　この死損ひめ——

倉田、又躍りかゝらんとするを人々止める。

倉田　（故と穏かに）好し、好し、亂暴はしねえ、云つて聞かせるのだ。（と人々を安心させて、雲衛門に近寄り）うぬのやうな馬鹿野郎でも、成上り根性でもな、泉太郎の目からは、やつぱり唯一人の親父に見えてゐるんだ。親父を、親父を、世間から非難される度に……彼は人知れず、どんなに小さな心を痛めてゐたか知れねえ。毎朝の新聞に親父の名が出る度に、不德者増長慢、背德者と世間から攻擊される度に、彼は始終蔭でオロ〳〵して、夜も眠らず苦しん

だんだ。

桃中軒　おゝ、おらあ不道德よ背德者よ。師匠にも背いた、女房も棄てた。その代り、おらあ藝人だ、天才だ。

倉田　まだ分らねえか、この野郎。背德、不道德は決して好ましいことぢやないぞ。ただお前には、その天才と藝術があるから許されてゐるんだ。その天分がなかつたら、うぬのやうな奴は、人間として蛆虫にも劣る奴だ。

桃中軒　何んだ、蛆虫だ？

倉田　（手を取つて引据ゑて）この野郎、聞かれねえのか。少年は學校で毎日窮屈な修身倫理を教へられてゐるんだぞ。その教師に教へられた倫理觀をもつて、お前の所行を見たら泉太郎は何んと思ふ。何んと考へる。

桃中軒　そんなくだらえ學校なら退つてしまへ。

倉田　馬鹿、おれは貴樣にその狹隘な倫理學を好いとも悪いとも云つてゐるのぢやない。その倫理學に養はれた泉太郎が、なほお前を尊敬し、崇拜して、貴樣のために世間の侮りを禦が

うとしたら、その心が可哀さうではないか、いぢらしく思はないか。親と思へばこそ、子となればこそだぞ。あの内氣な穩和しい泉太郎が、うちに歸つてお貞さんを目の敵にして爭ふのも、弟子どもと喧嘩するのも、みな親父の侮りを禦がうとする結果なのだ。見ろ、この頃、彼は双物など懷にして、人に不良らしく見られるも、實は彼としては、一身をもつて父の名譽を衞らうとしてゐるのだ。子だぞ、子だぞ、子なればこそだ。

桃中軒　餘計なお世話だ。おれはあんな弱虫の援助はうけない。おれはおれだ、雲右衞門だ。

倉田　貴樣は、今度泉太郎が何故こんな騷動を起したか、源因を知つてるか。何んのために十幾人を相手に短刀を振り廻したと思ふ。その理由を聞かせよう、泣くなよ、泣くなよ。

桃中軒　誰が泣く。馬鹿にするな。

倉田　泣くなよ。聞けよ。直接の源因は、その日寄宿舍の晩食が濟んで、生徒とも十二三人、廊下に出て月を眺めながら、笑つたり話したり賑かに騷いてゐたのだ。泉太郎は何か舍監に用事があつて、少し遲れて友達どもの仲間に加はつて行つたのだ。すると今まで笑ひ喋つてゐた十二三人の友達が、泉太郎の姿を見ると、ピタリと口を噤ぢて默つてしまつた　互に目

と目と囁き合つて、さも賤しみ輕蔑するやうな目付で、ヂロ〳〵と友達どもが泉太郎を眺めると云ふんだ。こりや可けないところへ來たと、泉太郎は思つたさうだ。見てゐた者の話には、その時少年は苦しさうに俯向いて、顏を上げられない、顯のあたりが少し蒼くなりかけて……ヂリ、ヂリ、と少しづゝ後退りして、その仲間からひとり離れやうとする模樣だつたさうだ。するとそのうちの一人が、突然月を指示して、あ、雲々と叫んださうだ。（話のうち次第に頭を垂れ、涙聲になりて）すると、十二三人……一同どつと笑つたさうだ。雲々、あゝ雲が〳〵と……みな口々に云つたさうだ。又どツと一同は……二度目に笑つたさうだ。泉太郎はもうカツとして自分を失つてゐた。いきなり短刀を拔いてそのうの一人に切りかゝつたのださうだ。（と涙を拂つて、屹と向き直り）さ、雲右衞門、これでも泉太郎は卑怯か、臆病者か。極度の全盛、人氣者には、得てして世間は無意識の反感と嫉妬を持つものだ。お前のこの頃の全盛勢力を見て、寄宿の學生どもまで漠然たる反感と嫉妬を抱いて、何かと云へば泉太郎に向つて嘲弄輕蔑の態度をとりたがつてゐたのだ。それに、この頃の新聞だ。毎日つゞいての雲右衞門攻擊の新聞だ。泉太郎にしてはそれを見る度、どんなにつらく、どんなに肩身

が狭かつたか知れねえ。後から友達どもの仲間に駈付けると、今迄笑つてゐたやつがピタリと止まる。ヂロヂロと、四方から見られる。ヒソ〳〵囁くやつがある。揚句の果が雲々だ。雲だ〳〵でドツと笑ふ、これぢや短刀抜かずにゐられるか、暴れずにゐられるか。雲右衛門、さ、云つてくれ、何う思ふ。

桃中軒　やつぱり弱虫だ。おれは嫌ひだ。

倉田　何！

桃中軒　さつきも云ふ通り、短刀を使つたのが可けねえ。ふだんそんなものを使るやうな弱い料簡があるから、人の侮りもうけるんだ。第一生意氣な、あいつ等の身分で雲右衛門の名譽を掩ふの、侮りを禦ぐのと云ふは、生意氣過ぎる。おれは天下の雲右衛門だ、悴に掩はれて生きるやうな、そんな意氣地なしぢやねえ。

倉田　（齒を噛んで）この野郎め、云ひたい放題のことを吐かす……。

桃中軒　それに聞けば後から、校長に說諭されて、相手の友達どもの前で、自分の惡かつたことを詫びたと云ふぢやねえか。詫びる位なら何故初めから短刀を抜く。

倉田　（ヂリ〳〵しつゝ）この野郎——

桃中軒　善くも惡くも、男が一旦踏み出したら、骨が舍利になつても、音を上げるものぢやねえ。退校が悲しいんでも、喧嘩が惡いんでもねえ。野郎の弱さが氣に入らねえ。おらあ子供とは思はねえ。

倉田　それぢや何か。何うでも、泉太郎を勘當するのか。九州の玄洋社へ逐ひ出してしまふのか。

桃中軒　當り前よ。そんなやつと同じ屋根に住んでゐられるか。直ぐ今、九州へ出發させてくれ。

倉田　（暫く睨めてから）好し、貴樣の子だ。貴樣の思ふやうにしろ。その代り、おれは貴樣に恥をかゝせてやる。

桃中軒　何んだ。

倉田　待て〳〵。

倉田、玄關に走り出ず。松月その後を追うて去る。やがて朝鮮產の大虎の皮を抱き來り、雲右衛門の

前にドサリと投出す。

雲右衛門、ハッとして少し顏色を變へる。

倉田　（遠くへ立つた儘指差して）　雲右衛門、それは何んだ。

桃中軒　何――

倉田　この虎の皮は何んだ。それを聞いてるんだ。

桃中軒　（度胸を定めて太々しく）　うむ、こりや先刻松月爺さんに賴んで、校長へ送物にしたんだ。

倉田　賄賂だな。悴の退校をゆるして貰ひたさに、そつと蔭から廻つて、賄賂をつかつたのだな。大きな口を利きながら、見つともねえ眞似をするな。

桃中軒　この賄賂で買はれる校長なら、買つた方が安値につくよ。はゝはゝ。

倉田　おらあ今日飽迄も校長と談判して、泉太郎の退校を取消させようと思つたが、校長が物靜かにこの虎の皮を出して、斯う云ふものは頂けません、お持歸り下さいと云はれた時には……最う何も云へなくなつた。悄然として泉太郎をつれて引退るより外はなかつたのだ。

桃中軒　兎に角、おれの悴ぢやねえ。（突と立上り）親父の苦勞した九州に、至急泉太郎を逐出してやつてくれ。

倉田　雲右衛門！……雲右衛門……。

雲右衛門、悠然として去る。電話の鈴、又けたゝましく鳴る。

道具廻はる。

その二

同じ家の離屋。いつか雪ふりつもりて植木、老松など白く見ゆる。椽側つき八疊ばかりの茶室めきたる茅葺の家。

日はとつぷりとくれて、電燈を點さぬ舞臺は暗し。

泉太郎、離屋の椽側に腰掛けて悄然として俯向く。松月老人、その傍にありて切りに慰めゐる。

雪降る。

松月　さ、早く〳〵、兎に角、倉田さんの家まで行つてゐて下さい。顔を見れば癇癪が起るんだ。年寄の云ふことは聞くものだ。さ、早く〳〵、早く。

泉太郎　好いんですよ、お爺さん。

松月　好いですよぢやない。酒も入つてゐるし、氣の立つてゐるところだ。又怒らしてはならねえ。賴むから、何うか、な、坊ちやん。

泉太郎　僕今日お父さんに、一生のお願ひがあるんです。

松月　それは何時でも出來ることだ。爺さんが引受けて、必ず聞いて貰つて上げるから、今日は兎に角わしの云ふことを聞いて下さい。（潛門の方へ引出さうとする）

泉太郎　厭ですよ、お爺さん。僕固く決心してゐるんです。

松月　これ、これ、强情はるものではない。怪我でもしたら何うする。あ、あれ……足音が聞える。遁げて、遁げて。

泉太郎　厭です、僕厭だ、厭だ。

雲右衛門、長髪を切り入道姿にて入り來る。

桃中軒（暗を透して）　誰だ、そこにゐるのは誰だ。

泉太郎　お父さん、僕です。

桃中軒　うむ、泉太郎か……。

松月（雲右衛門に）　これ、老爺が一生の願ひだ。何うかこの際、手荒なことなどして下さるな。小兒だ、小兒だ、まだ十七だ！

桃中軒（目にて去れと示しつゝ）電氣を寄來さしておくんなせえ。

松月　おらアお前さんの昔の師匠だ。賴むから、小兒に手荒なことなどしてくんなさるなよ。叱るなら口だけで、手を上げちやならないよ。賴むよ、賴むよ。

松月トボ〳〵として去る。

泉太郎は椽側に俯向き、雲右衛門はそこに坐りて、暫く無言。雪降る。

桃中軒　降り出して來たなあ、今夜は積るだらう。そこは寒からう、入れ。

泉太郎　はい……。

桃中軒　病院のお母さんも、何うやら駄目らしいぞ。

泉太郎　えゝ（と驚く）

桃中軒　あの電話が然うなのだ。今倉田が駈出して行つたさうだ。お前は……もう少し經つてから、おれと一緒に病院へ行かう　何うせ間に合はないのだ、こゝへ來てあたれ。

電燈、點る。泉太郎、父の頭を見て驚く。

泉太郎（思はず傍に來て）お父様

桃中軒　何アに、お母さんのために切つたと云ふのぢやねえ。少し考へたことがあるのだ。まあそれは、聞かずに置いてくれ。

泉太郎（決心して）お父様　僕一生のお願ひがあります。

桃中軒　何んだ。

泉太郎　僕をお父様の弟子にして下さい。

桃中軒　浪花節になるのか。

泉太郎　わたしも雲右衛門の悴です。二代目を繼いで、桃中軒の家を守つて行きたうございます。

桃中軒　お前學校を退校されて、急に然う考へたのか。はゝはゝゝ。（寂しく笑つて）何アに、學校なんかやめられても、人間の生きるところは何處にもあるよ。例へば竹籠を編んでも、手拭を染めても、現に人間みな生きてゐるではないか。心配するな〳〵、氣樂に世の中を渡

るのが何よりだ。偉い人間にならうと思ふな、安樂に、暢びやかに、世を渡るやうに考へてくれ。藝で身を立てる者の苦勞は、傍で見るやうなものぢやないのだ。

泉太郎　僕はそのため云ふんではないんです。僕はお父さんの健康も——

桃中軒　（愕然として悴の手頸を握り、鋭く）何んだ！

泉太郎　（萎れて）何うもこの頃……本當ぢやないと思ふんです。二代目を繼ぐ者がなければ、桃中軒は……このまゝ世間から消えて行くと思ふんです。

桃中軒　氣がついてゐたか。

泉太郎　はい。

桃中軒　（急にカラと〳〵笑つて立つ）二代目は要らない、眞の藝は一代で滅ぶべきものだ。一代で滅び、後につぐ者のないところに、その藝人の誇りがあるのだ。おれは何人の藝もついではゐない、隨つて後に殘す二代目はない筈だ。

泉太部　然し折角つくり上げたお父さんの節を——

桃中軒　後に殘さうと云ふのが藝人の氣の迷ひだ。一代に立ち、一代に滅びる。そこに藝人の

寂しさもあるが……又、悲しさをもつて買ふ誇りもあるのだ。はゝはゝ。氣の狹いことを云ふものぢやない。

泉太郎　……

桃中軒　それはなあ……、一人の藝術家がその藝の完成する迄には、その周圍に幾人の犧牲者をつくると思ふ。おれなども今日になるまで……何人の魂を食つて來たのか知れない。今日の病院のお母さんなども……その一人だ。そこに仆れ、こゝに仆れる……幾人かの屍を踏みこえて、やつとこの藝をつくつて來たやうなものだ。お前などは氣が弱い。その艱難には耐えられまい。（氣を換へて笑ふ）はゝはゝ。おれも愚痴を云ふやうになつたなあ……。はゝ、はゝはゝ。

雲右衛門、凝つと降る雪を見詰める。

（幕）

第五幕

時――大正五年十一月七日、午後。

處――東京郊外、雜司ヶ谷附近の家。

東京郊外の貸家らしき粗末なる新築家屋。二階家にて五室ほどの家。舞臺に見はるゝところは　雲右衛門が最後の病室とせる八疊ほどの二階なり。南向の日當りよき家にて、椽側の外は硝子障子にて、目白臺落合の晩秋の景色を展望す。北の方に高窓あり、銀杏の梢を見る。

室内中央に寢臺を置き、病牀とす、外に彼の過去の豪奢生活を偲ばしむるものとては舞臺用の卓子、友禪の樂屋蒲團、虎の毛皮などあり。

幕明く。雲右衛門、昏々として眠る。看護婦田内、瀨戸火鉢に凭れて婦人雜誌を讀む。

小春日の晴れ亘りたる午後にて、折々遠く省線電車の音を聞かせ、又耳に近く、懸巢の鳴音を聞くのみ。靑空靜かに澄みて、銀杏の黃葉明るし。

舞臺沈黑。かなり長き間。

雲右衛門、惡夢に魘はれたる人の如く、ホツと低く呻きて目を覺まし、うろ〳〵と周圍を見廻はしる。看護婦、雜誌を置きて傍に來る。

田内　（額に滲む冷汗を拭ひつゝ）お目覺めになりまして。

桃中軒　田内さん。

田内　は。

桃中軒　何か云ひましたか。

田内　いゝえ。

桃中軒　夢か――。

田内　今日は朝から、よくお寢みになりますね。

桃中軒　えゝ直ぐ……うと〳〵となるんです。

田内　二三日不眠がつゞきましたから、そのお疲れでせう。

桃中軒　窓をあけて下さいませんか。空が見たい。

田内、北側の窓を開くと。

桃中軒　下に話聲が聞えるやうだ。誰か來てゐますか。

田内　は、あの……。（と口曇りつゝ）新橋の何んとか仰しやる方……。

桃中軒　力八ですか。今日も來ましたか。この頃は、不思議なほどよく古い人達が尋ねて來てくれる。

田内　お天氣がつゞいて、郊外日和でございますもの。

桃中軒　今晩も鬼子母神のお會式で萬燈が賑ひませう。誰かに代つてもらつて、行つて御覽なさい。奇麗ですよ。

田内　は、有難うございます。（と檢溫器を挾む）

桃中軒　（檢溫を拒むやうに）今日は熱がないでせう。

田内　は、大してないやうですけれど、時間ですから。

桃中軒　青空はいゝですねえ……。病氣で寢てゐると、今まで何んとも思はなかつたものが、初めて有難さが知れますねえ。

田内　お御足が冷たかございませんか。湯タンポを換えませうか。

桃中軒　大丈夫です。それより少し起して下さい。

田内　又咳嗽が出ると可けませんよ。（と抱き起す）

桃中軒　（衰弱せし軀を牀上に起し）あゝ、好い心持だ。人間はたゞ起きて坐ると云ふことさへ、有難いことだ。立つて歩けるやうにさへなれゝば、最う何も要らないと思ひますね。

田内　（檢溫器をとりつゝ）何　もう直でございますわ。（と見る）

桃中軒　（不安さうに）熱はないでせう、上つてゐないでせう。

田内　え……大したことはございません。

桃中軒　九度二分ぐらゐですか。

田内　えゝ、最う少し……高いやうですけれど。

桃中軒　頑固な熱だねえ……（俯向きつゝ、階下の話聲を聞くこゝろにて）お力の外に、誰か來て

ゐますか。

田内　（當惑さうに）は、いゝえ、誰方も……。

桃中軒　男の聲も聞える。

田内　いゝえ、坊ちやんがお使ひからお歸りなすつたのでございませう。

桃中軒　然うですか。（深くも疑はず）障子もあけて下さい。田圃も見たい。

田内、南側の障子を開け放す。雲右衛門、ひとり何か考へながらクツ〳〵と笑ひ出す。

田内　何うなすつたのです。

桃中軒　いゝえ、考へると可笑しい。（笑ひつゝ）兵營生活すると、言葉つきまで妙に……軍隊訛りがつきますね。手足などの太くなつたこと、あれぢや大飯を食ふ筈だ。

田内　坊ちやんは、ほんとに好い體格でゐらつしやいますね。

桃中軒　小兒の時はねつから脆弱な奴でしたがね、軍隊へ行つてからあんなになりましたよ。日本服が厄介だなんて、錢湯へ行くにもカーキー色だから驚くねえ。（と樂しさうにクツ〳〵笑ふ）

田内　慥か、甲府の聯隊にゐらつしやるのですね。御休暇は何日までなのでございます。

桃中軒　もう追つつけ歸營するでせう。來てもう一週間近いから。

田内　ほんとに好いお聲なんですね。

桃中軒　何か歌つてゐましたか。

田内　昨晩も遲くまで、大石の東下りとか云ふのを、前の原ツぱで稽古してゐらつしやいました。三段流しとか云ふのが難かしいと仰しやつて、繰返し〳〵歌つてゐらつしやいました。

桃中軒　うと〳〵して遠くに聞いてゐたが、あれが泉太郎ですか。

田内　軍隊にゐらつしやつても、上官の許可を得て、始終聲を馴らしてゐらつしやつたのですつて。

桃中軒　然うですか、では遣つてゐたんですねえ……。（寂しく呟き、又）何うも下に誰か來てゐるやうだ、誰か呼んで下さい。

田内　はい。（廊下の階段口に行き、少し急な調子にて）奥様々々、誰方か些つと入らしつて下さいまし。

階下より「はい」と答へて、狼狽せる四五人の足音、梯子段を呼び鳴らして上り來る。藝者力八、主婦お時（泉太郎を育てたる人）門弟、某學生某の四人なり。

お時　何うなさいました。（枕元に走り寄る）

力八　先生！

桃中軒　お前達、何を慌てゝゐるんだ。何うしたんだ。

お時　は、あの……。

桃中軒　（不快さうに凝つと見詰めてから、低く）おれが死ぬと思つて、そんなに騒ぐのか。

お時　いゝえ、そんな、そんな……。

桃中軒　（目を瞑つて苦々しげに）未だ、死なないよ。

お時　御用は？

桃中軒　後でいゝ。

お時、人々に目くばせして、靜かに下りてゆく。力八、ひとり殘る。

桃中軒　お力、毎度見舞つてくれるが、醫者が何か云つたのか。

力八　いゝえ、あの今日は……竹の家のお上さんと、雜司ヶ谷まで一所に來たもんですから、それでちよつと寄せて貰つたんです。お上さんは一軒寄つて、後から直ぐ來ますの。

桃中軒　掛けろよ。（と倚子を示し）何しろお時とは、暫く一所にゐないもんだから、何かいふとオド〳〵して可けねえ。困つたものだ。

力八　何年ぶりで御一緒になつたのです。

桃中軒　あれが神明に出てゐたのは、二十年ほど前だ。暫くなかゞ途絶えてゐて、お濱と一所に九州へ落ちる時、あれに泉太郎を賴んで行つたのよ。

力八　（元氣をつけべく、わざと調子づいて）すると先生から云ふと、お時奥樣がそも〳〵の第一號ですね。それからお濱奥樣、千鳥さん——

桃中軒　皆死んだなあ……。おれの周圍に來る女は、皆順々に死んでしまつた。千鳥に死なれた時にも、力が落ちたよ。

力八　先生、大抵になさいよ。誰に聞かせるの。

桃中軒　それが廻はり廻つて、また最初のお時の厄介になつて……考へると可笑しくなるよ。

（寂しく苦笑す）

力八　それで好いのよ。納まるところに納つたのだわ。

桃中軒　納まるところ？　これがおれの納まるところか。

力八　いゝえ、そんな……

桃中軒　信州の一茶とか云ふ人の句に、これが、まあ終の住家か雪五尺と云ふ發句があるさうだ。おれはこゝを終の住家にして納つてはゐられない。

力八　當り前ですともさね。今一度花を咲かして頂かなければ、あたしどもだつて納まりません。先生が病氣になつてから、バツタリ浪花節は火が消えたやうですよ。

桃中軒　疲れた、お力、横にしてくれ。（力八と田内に抱されつゝ横になりながら）　遣るよ、お力。おれは必ず遣つて見せるぞ。山中溫泉にゐる時から、いろ〳〵目論見を立てゝゐる事がある。もう一度日本一の歌舞伎座の舞臺に立つて、東京中の人氣を唸らせて見せらあ……。

（呟き入る）

力八　ほんとにあの歌舞伎座で、勸進帳をお歌ひなすつた時の節、あたしやまだ耳に殘つてゐるやうですよ。

桃中軒　聞かせてえなあ……うむ、聞かせてえな。おらあ、もう今度の歌舞伎座にや、ちやんと臺本も出來てゐるんだ。素晴しいもんだ。びつくりするぜ。はゝはゝゝ。

力八　何しろあの時は毎日々々賣切つゞきで、雨の降る日なんか、雨傘が三原橋のところまで續いたなんて云ひましたよ。

桃中軒　何しろおれは客席を見廻はして、棧敷に行儀の惡い客を見付けると、そいつが坐り直すまでは歌ひ倒してやつたよ。はゝはゝゝ。（天井に詰めて、追憶的に）　あゝあ、暴れることも暴れた……我儘も云つた。その點ぢや死んでも殘念はねえよ。はゝはゝゝ。（又、下の話聲に氣がつき）何んだ、誰が話してゐるんだ。

力八　いゝえ、あの濱松の興行主とか云ふ人が來てゐますの。

桃中軒　今日も來たのか。呼んでくれ。

力八　今、泉太郎さんや桃雪が話をしてゐますから……。

桃中軒　氣に入らねえ、呼んでくれ。

力八、仕方なく降りてゆく。濱松の興行者津坂某、泉太郎と共に入り來る。泉太郎は入營中にて、軍服姿なり。

泉太郎　お父様、今僕から話をしてゐるんですよ。任せて置いて下さい。

桃中軒（仰臥のまゝ）濱松の男。おつと、闥から入つちや可けねえ。雲右衛門を何うしようと云ふんだ。

津坂（狡猾さうにへら〳〵笑つて）滅相な、何うしようなんて、そんな事はありませんが、何しろ組合の者どもがやかましく云ひますので、困りきつて居りますよ。

桃中軒　雲右衛門は寢てゐるんだ。何うして連れて行く氣だ。戸板なり畚なり持つて來い。

津坂　飛んだことを仰しやいます。いかに田舍者でも、御病中、そんな無法なことは申しません。たゞ何うにも地方の者どもが頑固なもんですから……。

桃中軒　手金を返してくれと云ふのか。

津坂　興行ものもこの頃は、至つて手詰りでございまして……。全く何うも目もあてられない姿でございます。

桃中軒　お前さんの兄きさんは慥か彦三と云つたな、達者かい。

津坂　へえ、お蔭様で。

桃中軒　おれが濱松に泊ると、あの人は宿屋に詰めきりで、風呂の水まで自分で汲み換えてくれたもんだ。泉太郎、枕の下の財布にそれぐらゐある筈だ。出してやんなよ。

泉太郎　ですから今それは桃雲とも相談して……。

桃中軒（獨語のやうに）おれを助からねえやうに見てゐやがるんだ。いゝや、生きッ返つて返禮にゆくから、出してやれ〳〵。

泉太郎　お父様、いま話がつくところなんですよ。

津坂　坊ちやん、失禮だが、そりや御相談になりませんよ。いかに桃中軒の御公達でも、藝に血筋は引きませんからねえ。

桃中軒　泉太郎、お前二代目でも繼がうと云つたのか。

泉太郎　いゝえ、來年除隊になつて後の話ですよ。若し親父の借金が殘つたら、おれの體で働いて返すと云つてゐるんです。

桃中軒　泉太郎。それぢやお前の體は、親父の借金の抵當になるぞ。
泉太郎　僕は……飽まで働くつもりでゐるんです。
桃中軒　それぢやお前の恥になる。あゝ……睡くなつて來た。出してやれ〳〵。（うと〳〵する）
泉太郎　（父の枕の下より縞の財布を取出しつゝ）君、五百圓だね。
津坂　證書はこれに持參して居ります。
泉太郎　さあ。（と金を渡し）歸つてくれ給へ。
津坂　どうも、飛んだお邪魔を致しました。では先生、お大事に遊ばしまし。御免下さい。
津坂某、惡丁寧に挨拶して歸り去る。
桃中軒　（目を開いて、自嘲的に）泉太郎、あと幾らも殘るめえ。
泉太郎　五圓紙幣が十……二三枚もありますか。（財布を枕の下に置く）
桃中軒　それが今の桃中軒の全財產だよ　はゝはゝ。
泉太郎　……
桃中軒　何アにそれで好いんだよ。何うにかなるさ。

雲右衛門、仰向いて目を閉づ、掛巢の聲、朗らかに聞ゆる。泉太郎、少し横に坐つて看護婦の讀みさしたる雜誌など見てゐる。
桃中軒　（間を置いて、不圖）それでお前は、何日兵營へ歸るんだ。
泉太郎　いゝえ、まだ構ひません。
桃中軒　然し、機動演習の休暇はそんなにあるまい。
泉太郎　けれども……何んです。磯野さんが來て中隊に願つてくれたものだから……許可があつたんです。ゆつくり看病して來いと、中隊長殿から許されたのです。
桃中軒　竹の家が？　甲府へ……行つてくれたのか。
泉太郎　え、然うなんです。
桃中軒　然うか……。おれは知らないうちに、方々からみんなの好意をうけてゐるなあ……。
泉太郎　それに聯隊長閣下は、極端な雲右衛門贔屓ですから、大變都合がよかつたのです。
桃中軒　然うか……（疲れてうと〳〵せる聲）
間。掛巢の聲聞ゆ。

桃中軒　（ポッと目を覺まし）　泉太郎、もう何時だ。
泉太郎　時間ですか。（立つて階下の時計を見に行かんとす）
桃中軒　いや、この枕の下に……一昨日竹の家のお神が持つて來てくれた時計がある筈だ。
泉太郎　（出して見て）　二時十五分過ぎました。
桃中軒　好い時計だらう。その文錢の提物が洒落てゐるよ。
泉太郎　銀側ですね。
桃中軒　雲右衛門の全盛には、金もプラチナも時計は腐るほどあつた。然し今のおれにや……やツぱり銀側がいゝ。金やプラチナは……光り過ぎて、目が痛くなる。……はゝはゝ。何あに、これからよ、これからだ。今まではなあ、おれも他人の事にばかり錢をつかつて、お前達のことを考へなかつた。これからはお前達のためにも働くよ。
泉太郎　は……。
桃中軒　お前おれの、借金の抵當になぞなつては可けねえよ。お前はお前の世の中を作つて行かなきあならねえのだ。雲右衛門の子に生れたことが、お前の不幸になつちやならねえ、な、

分つたな、分つたな。
泉太郎　はい……。
桃中軒　何アに大丈夫だよ。この頃もそつと聲を出して見ると、段々出るやうになつた。この咽頭さへ死なければ、いつでも一聲千兩だ、心配するな、心配するな。はゝはゝ。
泉太郎　……
桃中軒　二代目をつぐなんて考へちや可けねえよ。おらあ何んだか、お前の節を聞くと……弔ひ歌を唄はれてゐるやうな氣がしてならねえ。……心細くなるよ！
泉太郎　お父様、最う決して歌ひません。名人は一代と云ひます、お父様限りにして後に殘しますまい。
桃中軒　まだ歌ふんだよ。おりやこれから回復して、まだ〳〵歌ふ氣でゐるんだよ。はゝはゝ。

看護婦田内、洗物など持ち歸り來る。藥をコップに注ぎて持ち來る。

田内　水藥の時間でございますよ。

桃中軒　有難う。（飲む）

田内　（脈など見つゝ）今日はお客様つゞきでお疲れのやうですから、少しお休みになつたらいいでせう。

桃中軒　えゝ、然うしませう。

雲右衛門・おとなしく目を瞑る。田内、不安さうなる目付にて、泉太郎に囁く。泉太郎、階下に駈出さんとす、田内、止める。泉太郎・父の足部の方に立ちて凝つと寢顔を見る。

掛巢、鳴く。倉田楚水に磯野一石、靜かに入り來る。倉田等泉太郎と目にて囁き合ひて、互に顏色を雲らす。やがて二人は窃つと忍び足に寄り來り、凝つと雲右衛門の顏を見詰む。

雲右衛門・はつと呼吸をつめて目を覺ます。

桃中軒　おゝ倉田か。竹の家さんか……

倉田　（わざと元氣らしく笑つて）好く寢てるから、寢顏に見とれてゐるところよ。

桃中軒　まるで芝居でする淸玄のやうだらう……。

倉田　病人は小穢ねえなあ。早く奇麗になれ。（寢臺を離る）

桃中軒　竹の家さん、毎度有難う。

磯野　はゝはゝゝ（笑に紛らして）何を仰しやるんだ。

桃中軒　倉田、お前は薄情者だぞ。旅行の何んのつて、些つとも寄り付きやしねえ。

倉田　女用で、急がしいよ。

倉田、椽側に出て涙を拂ふ。磯野、取つてつけたやうに大聲に笑ふ。

桃中軒　何を云やがる。お前に女が出來るもんか。

倉田　出來るから不思議ぢやねえか。見してやらうか、パリ〳〵だぞ、一流だぞ。

桃中軒　はゝはゝゝ、大方急行の止らねえ宿場の一流だう。

倉田　宿場つて云へば、それ二人で房州の船形で遊んだつたつけな。

桃中軒　うん、あの時お前は紅生薑見たいな赤い藝者を買つたぜ。

倉田　お前のだつて、云ふことはねえよ。染更紗の模樣に出るやうな女だつたよ。

桃中軒　おらアそれでも、毛切らずビロードの煙草入を貰つた。

倉田　竹の家さん、その時こいつはね浪花節を歌つて聞かせて、ちよいと雲右衛門節に似てる

わつて云はれやがつた。

磯野　はゝはゝゝ。

三人、どつと笑ふ。

桃中軒　起してくんねえか、起きたくなつた。

倉田　舍せよ、病人などの這出す幕ぢやねえ。

桃中軒　病人々々と、安く扱ふな、今にこれでも羨しいやうな若いのをつくつて見せる。

倉田　馬鹿云へ。女で太刀打はおれにや出來めえ。

桃中軒　畜生！　竹の家さん、起して下さい。

磯野　大丈夫ですかい、先生。

桃中軒　口惜しいからねえ、倉田に一つ聞かしてやるんだ。驚くな。

倉田　何アにを吐しやがる。

磯野と看護婦、と雲右衛門を抱き起す。左右より抱きゐる。

桃中軒　實はね、竹の家さん、おらあこの頃うちから一つ纏めたものがあるんだ。辨慶、衣川

の段よ。おらこいつをもつて世間を驚かしてやる氣なんだ。泉太郎、鉛筆でゝもいゝから、そこに文句を書つけて置け。

磯野　先生、あなたそんな無理をなすつちや可けませんよ。病氣に觸はりますよ。

倉田　（目で相圖して）歌ひてえと云ふなら、歌はせるがいゝですよ。どうでロクな聲が立つ筈はねえ。

桃中軒　馬鹿にするな。これでも天下の雲右衛門だ。

倉田　腐つても鯛と云ふが、お前の腐り方は夜店のバナナだらう。（椽側を歩み廻はる）

桃中軒　驚くな、はゝはゝゝ、驚くな。泉太郎書付けて置け。

雲右衛門、文句を打案じながら微音にて辨慶衣川の一節を唄ふ。一句の終り毎に倉田を尻目にかけつゝ、「何うだ、一聲千兩だ。」「何うだ、はゝはゝゝ。」「何うだ。」「千兩々々」などの語を挾みつゝ歌ふ。その節の間に階下の人々次第に上り來り椽側に立さ重なりて、悄然として聞く。

（靜かに幕）

56
17

昭和二年九月十日印刷
昭和二年九月十八日發行

版權所有

鼠小僧次郎吉
桃中軒雲右衛門
定價壹圓八拾錢

著者　眞山青果
發行者　山本美　東京市麴町區內幸町一ノ三
印刷者　椎名昇　東京市芝區田村町十四番地

發兌　東京市麴町區內幸町一丁目三番地　改造社
振替東京八四〇二番
電話銀座一七三三番 四五五八番 五〇四六番

二葉印刷所印刷

改造社圖書目録

（昭和二年七月現在）

著譯者名	書名	定價	送料
穂積重遠著	離婚制度の研究	一〇・〇〇	内三六〇
河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	二・〇〇	二〇〇
宮本英雄著	婚姻の基調	一・五〇	一八〇
福田徳三著	社會運動と勞銀制度	二・五〇	二〇〇
小泉信三著	改訂價値論と社會主義	三・二〇	二八〇
孫田秀春著	勞働法總論	二・六〇	二六〇
富士辰馬譯（ジノヴィーフ原著）	勞働政黨と勞働組合	一・九〇	一四〇
茂森唯士譯（ニコライレーニン原著）	レーニニズム	一・二〇	一六〇
本庄榮治郎著	日本社會史	二・五〇	二四〇
本庄榮治郎著	日本財政史	二・五〇	二四〇
河田嗣郎著	農村問題と對策	二・〇〇	二〇〇
河田嗣郎著	社會問題綱要	四・五〇	内二七〇
河西太一郎著	農業問題研究	二・三〇	二二〇
末弘嚴太郎著	農村法律問題	二・五〇	二二〇
末弘嚴太郎著	嘘の効用	二・六〇	二二〇
末弘嚴太郎著	法窓閑話	二・五〇	二二〇
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	一・三〇	一六〇
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	一・三〇	一二〇
森戸辰男著	學生と政治	一・三五	一二五
森戸辰男著	思想鬪爭史上に於ける社會科學運動の重要性	一・三五	一二五
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	二・〇〇	二〇〇
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無産階級の哲學	二・五〇	二二〇
本庄榮治郎著	近世農村問題史論	二・三〇	二二〇
河田嗣郎著	農政四十三講	二・五〇	二二〇
平野義太郎著	法律における階級鬪爭	二・五〇	二二〇
小野武夫著	農村研究講話	一・五〇	一八〇
小野武夫著	日本農民史語彙	三・五〇	二二〇
末弘嚴太郎著	勞働法研究	三・〇〇	二四〇
堀江歸一著	國際經濟總論	三・三〇	二六〇
堀江歸一著	改訂增補國際經濟と國民經濟	二・五〇	二六〇
堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	三・五〇	二二〇
堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	三・〇〇	二六〇
堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	四・〇〇	三〇〇
マーシャル著 大塚金之助譯	經濟學原理（分冊一）	三・五〇	二四〇
マーシャル著 大塚金之助譯	經濟學原理（分冊二）生産要因	三・〇〇	二四〇
マーシャル著 大塚金之助譯	經濟學原理（分冊三）需要・供給・價値の一般關係	三・五〇	二八〇
マーシャル著 大塚金之助譯	經濟學原理（分冊四）國民所得の分配	三・七〇	二八〇
高田保馬著	階級及第三史觀	二・八〇	二四〇
野村兼太郎著	近世商業史	三・〇〇	二六〇
山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	一・五〇	一八〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	二・〇〇	二〇〇
ブハリン原著 富士辰馬・横田千元共譯	唯物史觀	三・五〇	二八〇
ブハリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	二・〇〇	二二〇
持地六三郎著	日本植民地經濟論	二・八〇	二二〇
森戸辰男著	思想と鬪爭	二・〇〇	二〇〇
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	二・五〇	二四〇
渡邊一郎著	勞働問題原理	二・〇〇	二〇〇
高畠素之著	マルキシズムと國家主義	一・〇〇	一八〇
アーサー・レウキス著 高畠素之譯	改訂社會主義社會學	一・〇〇	一六〇
高畠素之著	社會主義と進化論	一・〇〇	一八〇
カウツキイ著 高畠素之譯	改譯資本論解説	一・〇〇	一八〇
口田康信著	國家思想の研究	二・〇〇	二〇〇
大山郁夫著	現代日本の政治過程	二・五〇	二二〇

森莊三郎著　法制講話　二・二五〇

朝永三十郎著　カントの平和論　一・五一八〇

阪内務事務官 三宅司法書記官著　増補普通選擧法要綱　一・八一六〇

田中耕太郎著　法と宗教と社會生活　二・五二〇

廣濱嘉雄著　私法學序說　三・〇六〇

末川博著　ソヴイエトロシアの民法と勞働法　二・五二〇

高柳賢三著　現代法律思想の研究　四・五二七〇

松本亦太郎著　心理學講話　三・五六〇

松本亦太郎著　智能心理學　九・〇三六〇

桑田芳藏著　ヴントの民族心理學　三・五二四〇

米田庄太郎著　文化哲學叢書 第一篇 リツケルトの歴史哲學　四・七二六〇

板垣鷹穗著　文化哲學叢書 第二篇 新カント派の歴史哲學　一・五一八〇

恒藤恭著　文化哲學叢書 第三篇 ジムメルの經濟哲學　三・〇二〇〇

勝部謙造著　文化哲學叢書 第四篇 ディルタイの哲學　二・〇二〇〇

植田壽藏著　藝術哲學　二・七二四〇

清原貞雄著　日本道德論　四・五三〇〇

長田新著　現代教育哲學の根本問題　三・〇二四〇

賀川豐彦著　生存競爭の哲學　二・〇二〇〇

武内義雄著　老子の研究　三・五二八〇

佐藤繁彦著　體驗宗教の研究　二・〇二〇〇

辻潤譯 ステイルネル著　自我經　二・八二〇〇

桑木彧雄著　物理學と認識　一・五一八〇

關寛之著　學校兒童心理學　二・七二〇〇

長尾正人譯 エム・シー・コールター著　遺傳學概論　一・八二〇〇

松崎實編　校註 切支丹鮮血遺書　三・五二八〇

有島武郎著　愛する人々へ　三・〇二四〇

吉江喬松著　近代文明と藝術　二・〇二〇〇

里見弴著　文藝管見　一・二一六〇

厨川白村著　苦悶の象徵　一・八二〇〇

厨川白村著　近代の戀愛觀　二・五二〇

昇曙夢著　露國現代の思潮及文學　四・八三〇〇

阿部次郎著　學藝論鈔　二・二〇〇

阿部次郎著　北郊雜記　一・九一八〇

村岡典嗣著　吉利支丹文學抄　三・五二六〇

武者小路實篤著　文學に志す人に　一・三一八〇

太宰施門著　ロマンチク時代　二・〇一八〇

石原純著　戀愛價値論　一・六一八〇

親佛文學會編　ゆかり　上三・五二〇　特六・〇〇〇

高野辰之著　日本演劇の研究　四・〇三〇〇

菊池寛著　文藝當座帳　一・五一八〇

正宗白鳥著　文藝評論　一・八二〇〇

齋藤茂吉著　朝の螢　一・五一八〇

島木赤彦著　十年　一・五一八〇

古泉千樫著　川のほとり　一・八一八〇

中村憲吉著　松の芽　一・八二〇〇

釋迢空著　海やまのあひだ　一・八二〇

木下利玄著　立春　一・八二〇〇

與謝野晶子著　人間往來　一・八二〇〇

前田夕暮著　原生林　一・八二〇〇

土岐哀果著　空を仰ぐ　一・八二〇〇

若山牧水著　野原の郭公　一・八二〇〇

窪田空穗著　槻の木　一・八二〇〇

倉田百三著　超克　二・二二〇〇

賀川豐彦著　星より星への通路　二・〇二〇〇

若山牧水著　樹木とその葉　二・〇二二〇

長谷川如是閑著　犬・猫・人間　一・八二六〇

堺利彦著	野外劇の一幕	一・五〇	一・一六〇
中澤臨川著	嵐の前	一・五〇	一・一六〇
高濱虛子著	朝の庭	一・七〇	一・一六〇
武者小路實篤著	筆の向くまゝ	一・一〇	一・一四〇
河東碧梧桐著	二重生活	一・二〇	一・一六〇
新村出著	南蠻更紗	二・六〇	二・二〇
野口米次郎著	先驅者の言葉	一・八〇	一・一六〇
野口米次郎著	坐る人間の評論	二・〇〇	一・一八〇
富田溪仙著 下店靜市編	溪仙八十一話	三・〇〇	二・六〇
岸田國士著	言葉〻言葉・言葉	一・八〇	一・一八〇
幸田露伴著	幽祕記	二・五〇	二・二四〇
幸田露伴著	龍姿蛇姿	二・五〇	二・二〇〇
土肥慶藏著	鶚軒游戲	三・〇〇	三・二四〇
瀧精一著	文人畫概論	二・〇〇	二・二〇〇
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	三・八〇	三・二二〇
岸田劉生著	圖畫教育論	三・五〇	三・二二〇
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	一・五〇	一・一八〇
木下杢太郎著	支那南北記	三・〇〇	三・二四〇
改造社編	大正大震火災誌	内 一・五〇	内 一・四五〇
ビシヤラ・ナハス著 高瀨毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	一・八〇	一・一六〇
村松梢風著	近世名匠列傳	二・三〇	二・二〇〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	一・五〇	一・一八〇
大杉榮著	自敍傳	二・〇〇	二・一八〇
幸田露伴著	蒲生將氏平郷門	二・〇〇	二・二〇〇
幸田露伴著	賴朝・爲朝	二・〇〇	二・二〇〇
柳澤健著	ジヤン・ジョレス	一・五〇	一・一八〇
堺利彦著	堺利彦傳	一・九〇	一・二〇〇
野口源三郎著	オリンピアへの旅	二・五〇	二・二〇〇

芥川龍之介著	支那游記	二・〇〇	二・二〇〇
賀川豐彦著	雲水遍路	三・〇〇	三・二六〇
河合榮治郎著	在歐通信	二・〇〇	二・一八〇
石原純 山田光雄 遠藤美壽 阿部良夫 共編	アインスタイン全集 全四冊	各五・〇〇	各二・六〇
桑木彧雄著	物理學と認識	一・五〇	一・一八〇
佐藤庄司 彥六 充 共著	近代物理學概觀	三・〇〇	三・二二〇
中澤臨川著	電子說から見た世界	一・八〇	一・一八〇
佐藤春夫著	童話ピノチオ	一・八〇	一・一八〇
關寬之著	學校兒童心理學	二・七〇	二・二二〇
佐藤春夫著	蝗の大旅行	三・五〇	三・二二〇
熊谷一彌著	改造社運動叢書第一篇 テニス	二・三〇	二・二〇〇
三宅大輔著	改造社運動叢書第二篇 野球	二・八〇	二・二二〇
梅澤親光著	改造社運動叢書第三篇 水泳	二・〇〇	二・一八〇
平井左門著	改造社運動叢書第四篇 山岳スキー	二・五〇	二・二〇〇
香山蕃著	改造社運動叢書第五篇 ラグビー	二・五〇	二・二〇〇
東京帝大スキー山岳部編	改造社運動叢書第六篇 スキーイング初步	一・五〇	一・一八〇
長谷川宗憲著	改造社運動叢書第七篇 ボート	三・五〇	三・二四〇
槇有恒著	山行	三・二〇	三・二二〇
賀川豐彥著	長篇小說 死線を越えて（上卷）（廉價）	一・〇〇	一・一八
賀川豐彥著	長篇小說 死線を越えて（中卷）太陽を射るもの（廉價）	一・〇〇	一・一八〇
賀川豐彥著	長篇小說 死線を越えて（下卷）壁の聲きく時（廉價）	一・〇〇	一・一八〇
志賀直哉著	直哉傑作選集 壽々	二・五〇	二・二二〇
志賀直哉著	雨蛙	二・五〇	二・二二〇
芥川龍之介著	沙羅の花	二・八〇	二・二二〇
里見弴著	改版 版直輔の夢	一・五〇	一・二〇〇
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	一・九〇	一・二〇〇
武者小路實篤著	戲曲愛慾	一・六〇	一・一八〇
正宗白鳥著	戲曲ある心の影	一・六〇	一・一八〇

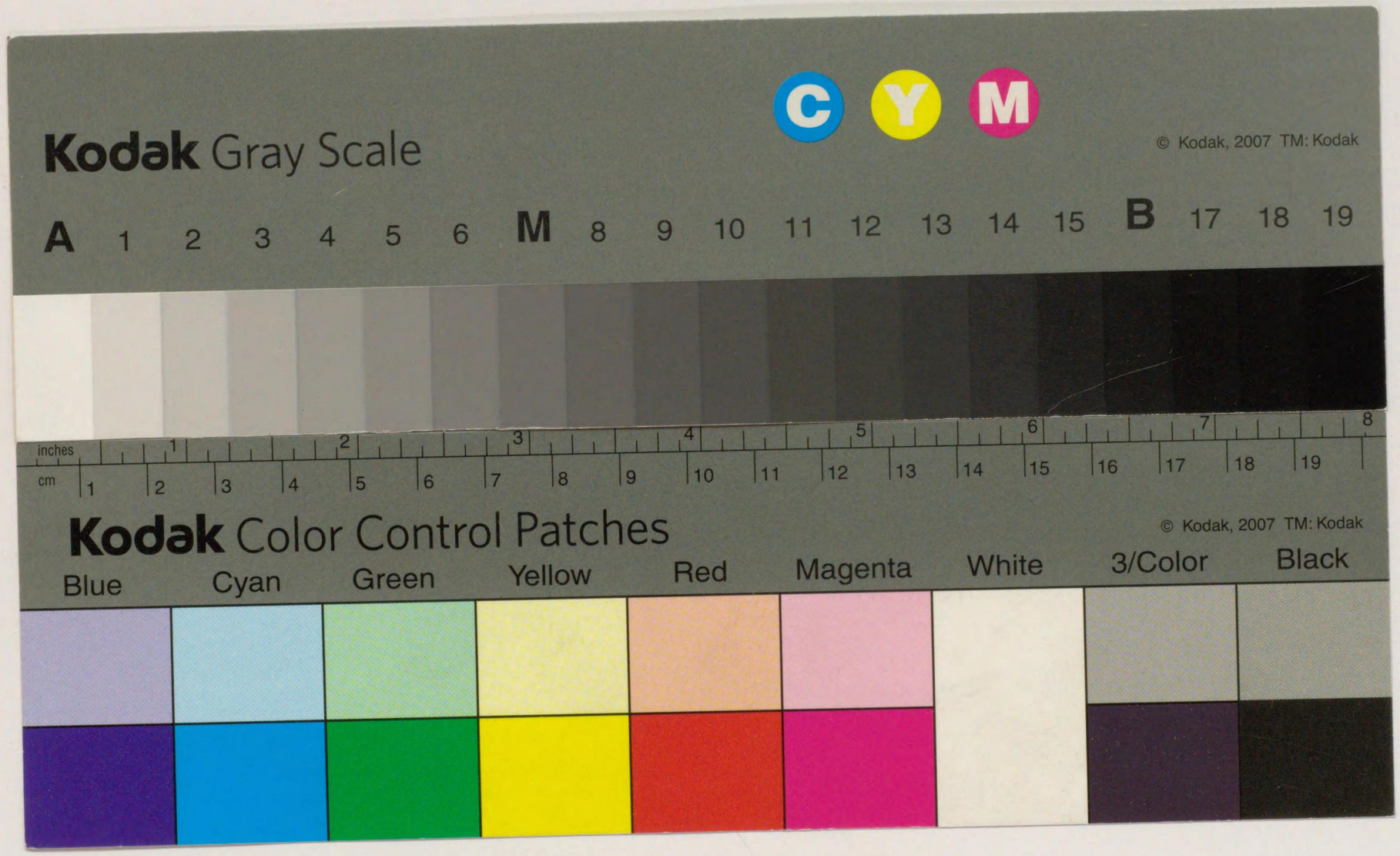
568
177

正宗白鳥著	安土の春	一・三六〇	里見弴著	緣談宴	二・三二〇
正宗白鳥著	歡迎されぬ男	一・五八〇	アプトン・ジンクレア著 前田河廣一郎譯	義人ジミー	二・〇〇〇
イベニエス原作 鈴木厚譯	血と砂	二・六二〇	葉山嘉樹著	海に生くる人々	一・五八〇
ジョルジュ・サンド著 田沼利男譯	鬼火の踊り	一・八八〇	柳原燁子著	則天武后	一・六八〇
廣津和郎著	秋の一夜	一・六八〇	山本有三著	嬰兒殺し	二・〇〇〇
藤森成吉著	惱み笑ふ	一・三八〇	菊池寛著	戀愛病患者	一・五八〇
藤森成吉著	故郷	一・五八〇	菊池寛著	啓吉物語	二・〇二〇
野上彌生子著	海神丸其他	一・三八〇	菊池寛著	第二の接吻	二・〇〇〇
岸田國士著	麵麭屋文六の思案	一・二五〇〇	三宅やす子著	奔流	二・三〇〇
佐藤春夫著	窓展く	二・〇〇〇	横光利一著	春は馬車に乘つて	一・二〇〇
德田秋聲著	過ぎ行く日	一・八〇〇	リベディンスキイ著 池谷信三郎譯	一週間	一・九八〇
細井和喜藏著	工場	二・〇〇〇	田中貢太郎著	蛇精	一・九〇〇
細井和喜藏著	奴隷	二・〇〇〇	トマス・ハーディ著 内多精一譯	薄命のヂユード	三・二四〇
細井和喜藏著	無限の鐘	二・〇八〇	細田民樹著	或兵卒の記錄	二・五二〇

泉鏡花著	番町夜講	二・二〇〇	北村壽夫著	幻の部屋	一・六八〇
谷崎潤一郎著	新選谷崎潤一郎集	内 五・五〇 三七	長田幹彥著	戲曲 愛僧篇	一・六八〇
谷崎潤一郎著	愛すればこそ 愛なき人々	縮一・〇 冊六	吉田絃二郎著	運命の秋	二・〇〇〇
里見弴著	大道無門	二・〇二〇	吉田絃二郎著	父	一・九二〇
谷崎潤一郎著	痴人の愛	二・〇二〇	吉田絃二郎著	ダビデと子たち	一・八〇〇
谷崎潤一郎著	鮫人	二・〇二〇	吉田絃二郎著	芭蕉	一・六八〇
谷崎潤一郎著	赤い屋根	二・〇二〇	吉田絃二郎著	一人歩む	一・八二〇
中河與一著	恐ろしき私	一・八八〇	吉田絃二郎著	旅人	一・八〇〇
武林無想庵著	文明病患者	二・三〇〇	小山内薰著	戲曲 森有禮	一・三八〇
片岡鐵兵著	綱の上の少女	二・〇〇〇	岡本綺堂著	江戸子の死	二・〇二〇
葛西善藏著	哀しき父	一・九二〇	國枝史郎著	劍俠受難	一・〇八〇
近松秋江著	二人の獨り者	二・〇〇〇	志賀直哉著	山科の記憶	一・五〇〇
犬養健著	一つの時代	二・五二〇	室生犀星著	庭を造る人	二・〇〇〇
ビルドラック著 鈴木斐子譯	みつけもの	一・五八〇	江見水蔭著	明治文學資料第一卷 硯友社と紅葉	一・五〇〇

568
177

568
177


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black